日韓交流と渡来人
― 古墳時代前期以前 ―

武末　純一

1　はじめに

ここでは弥生時代から古墳時代前期の対外交流の主流であった朝鮮半島と日本列島との交流を、渡来人の視点から述べる。北部九州の集落資料が主体で、弥生時代のはじまり（弥生時代早期～前期初）、国の形成（弥生時代前期末～中期前半）、楽浪・三韓との交易（弥生時代後半期）、金官加耶・百済（馬韓）との交易（古墳時代前期）の４時期とする（図１）。ただし、日本列島の事象だけで交流を語るのは片手落ちであり、朝鮮半島の倭人についても述べる。なお、当該期の朝鮮半島の時代区分は、無文土器時代、原三国時代、三国時代とする[1]。

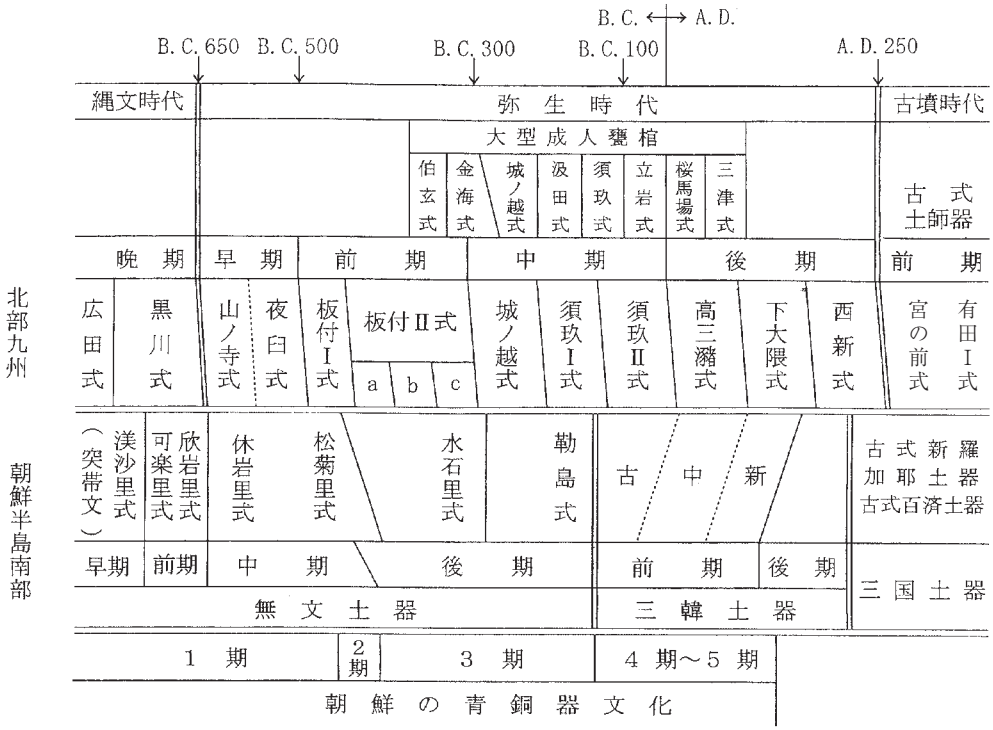


図１　北部九州の弥生時代と無文土器・原三国時代の併行関係

2　具体的な検討の前に

渡来人研究は集落の渡来系資料を中心に進めるべきである。古墳時代では、これまで古墳の出土品で渡来人を語る傾向が強かった。しかし、古墳の出土品は、さまざまな脈絡の果てにそこに納められる。また、古墳は墓であり、人の死に際しては、日常生活とは異なる人間関係が立ち現れる。福岡県宗像市沖ノ島の古墳時代祭祀遺跡では、古墳出土品と共通する朝鮮半島系の渡来系金属遺物が多数出るが、朝鮮半島系の土器はほとんど無く、渡来人が主宰した祭祀の島とはほとんど誰も考えない。とくに沖ノ島の４～５世紀の遺物組成は古墳出土品と同じで、葬祭未分化の時期とされる。古墳と同じ組成の沖ノ島の渡来系遺物で渡来人を語るのが困難ならば、古墳出土品でも同様である。そこで、古墳から出た遺物を用いて渡来人を語るには、遺構のつくりや遺物の出土状況を加味した検討が必要になる。

したがって、渡来人集団をより直接的に捉えるには、日常生活の痕跡そのものである集落出土渡来系資料を検討の中心に据えるべきである。

ある地域での他地域の資料を摘出する原則を、特に遺物（土器）について筆者はかつて、

1）出現の時点で、それまでなかった形とつくりをもつ（不連続）。

2）出現の時点でどこにでもではなく（非普遍）、各遺跡での比率も一定しない（不安定）。

3）逆に故地では、各遺跡での比率が一定し（安定）、どこにでもあり（普遍）、形やつくりがその前から続く（連続）。

4）他の考古資料からも矛盾しない。

と考えた（武末純一 1991）。これによって日本列島の中の朝鮮半島系遺物（朝鮮系遺物）はもちろんのこと、朝鮮半島の中の日本列島系遺物（倭系遺物）も原則に照らして摘出できる。こうして摘出された渡来系遺物のうち、特に酸化焔焼成の炊事用土器の研究を進める必要があり、そこで渡来人集団を捉えた上で、墳墓研究と結合するべきである。

これまで集落出土渡来系遺物の研究は、その有無や、もっとも捉えやすい搬入品・忠実再現品の検討に偏っていた。しかし、以下の点に及ぶ必要がある。

1. 集落の中で、どんな施設や場から出るかを検討する。
2. もっと変容品（擬〇〇土器）[(2)]を活用し、その変化相を把握する。他人の空似を誤認する危険性もあるが、渡来人集団と地域社会の関わりや地域社会の変化の把握に必要である。
3. 漠然とした中国大陸や朝鮮半島ではなく、その中のどの地域かを追究し、故地との関わりを把握する。

さらに、渡来系の遺物や遺構が出る集落も一様ではなく、時期や地域から、いくつかに類型化できる。そして､同時期でしかも渡来系の遺物や遺構を持たない集落との対比を常に心がけたい。

渡来系の文化や要素は、その定着や普及にいつも成功はせずに、失敗する場合も多い。集落レベルでは定着するが、地域レベルでは普及に失敗する場合もあろう。ただし、失敗しても在地社会がわずかに変化するときもある。私たちは、渡来ですぐに技術が移転して広がり盛行すると考えがちだが、ときに時間差もあり、「渡来人の定着によるその地域と故地との交流回路の開設と

維持」を考えたい。また、渡来は最初の一時点だけとは限らない。

地域が多軸性、重層性、多様性を持つのと同様に、地域空間の一部をなす集落もまた、その中がいくつかの区域に分かれて重なり（重層性）、それぞれが異なる機能を果たす（多様性）場合があり、また、渡来人の集団的な居住集落でも、故地とは異なる幾つかの地域とも同時につながる（多軸性）。

最後に、出土した資料は調査地点の偏りなど不均質な場合が多い。また、発掘資料が全てではない。失われた資料や未調査部の程度と、集落の範囲を常に考えたい。

3　弥生時代のはじまり－中期無文土器人たち－

弥生時代には、農業が始まり日本列島の多くの人々が採集民から農民になっていき、日本の歴史の中でも大変革期に当たる。例えば、佐賀県唐津地域（『魏志倭人伝』の末盧國）の場合、旧石器・縄文時代の遺跡は西側の上場台地に多く分布するが、弥生時代になると当時の海岸線に沿って東側の唐津平野にびっしりと分布する（図2）。弥生時代のはじまりに多くの人々が山から下って、縄文時代とは全く異なる景観の中で暮らし始めたことがわかる。

この大変革には渡来人と渡来文化が大きな役割を果たした。低顔低身長の縄文人と高顔高身長の渡来系弥生人の顔立ちや身長は異なり、朝鮮半島南部の無文土器時代中期の休岩里式や松菊里

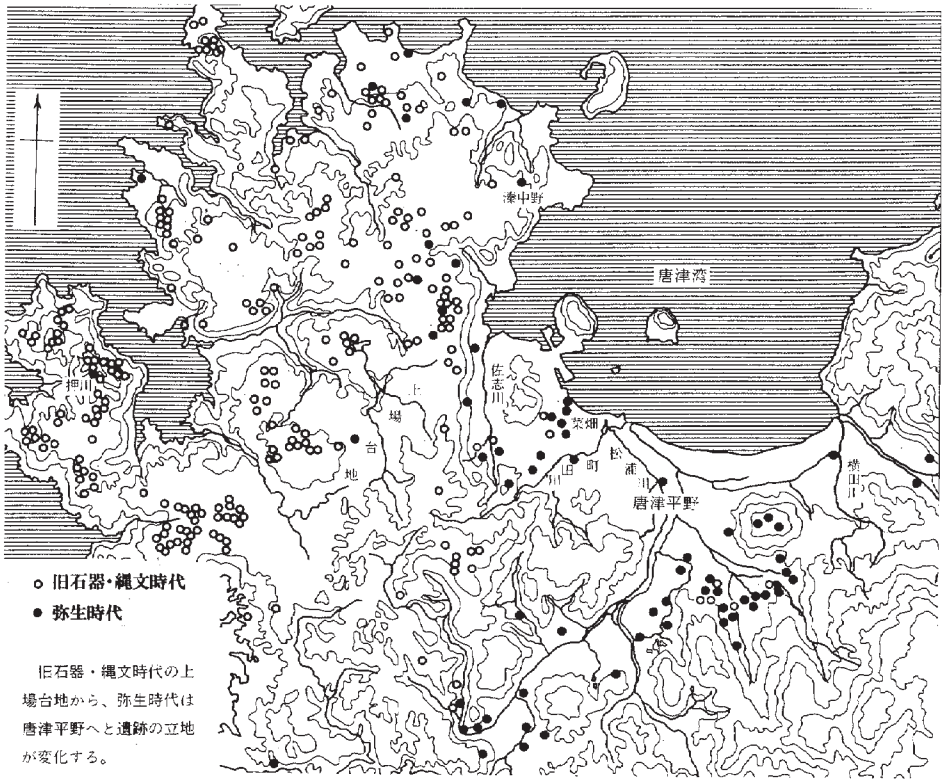


図2　唐津地域の遺跡分布図

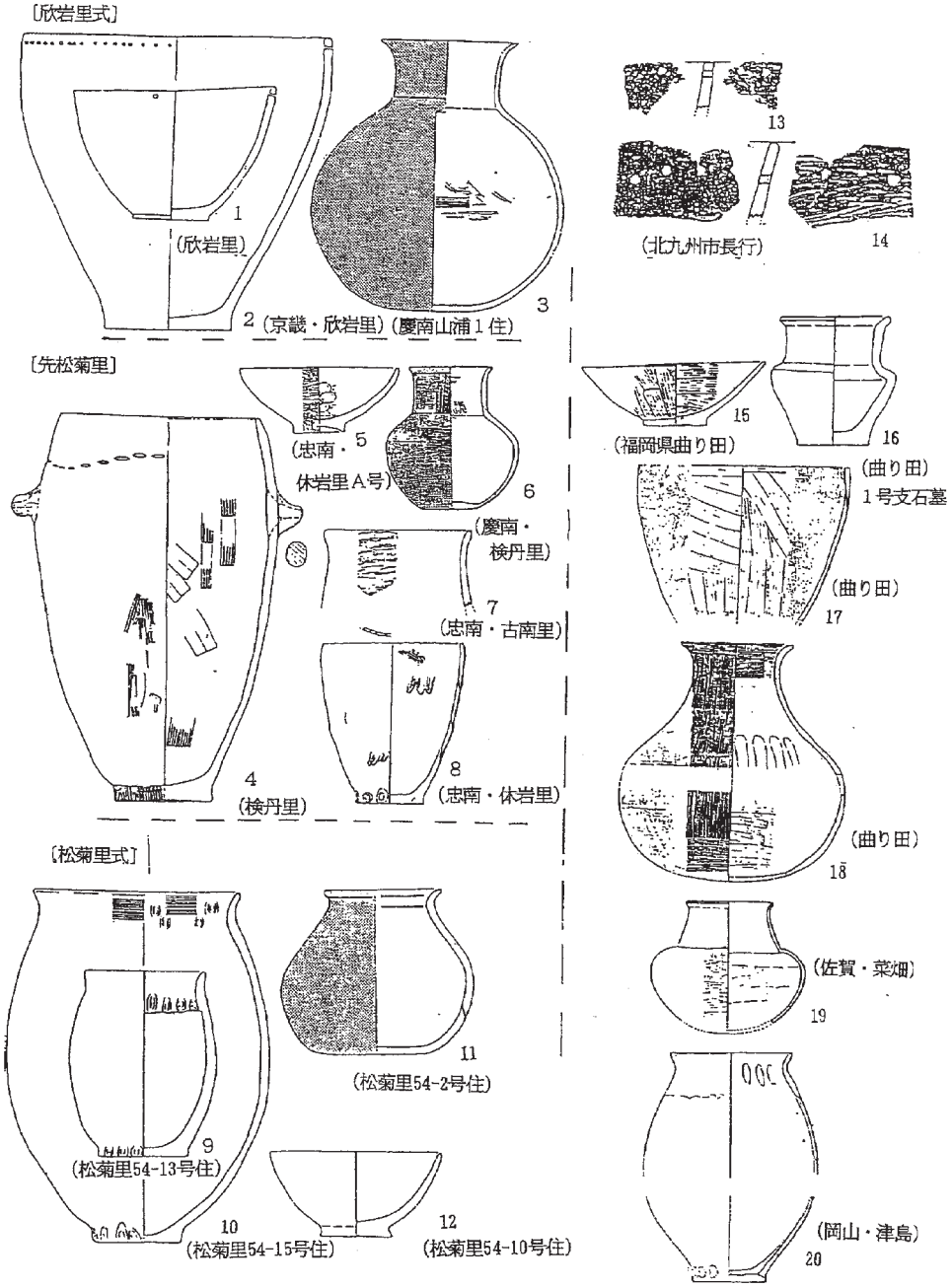


図3　前・中期無文土器と関連する日本の土器

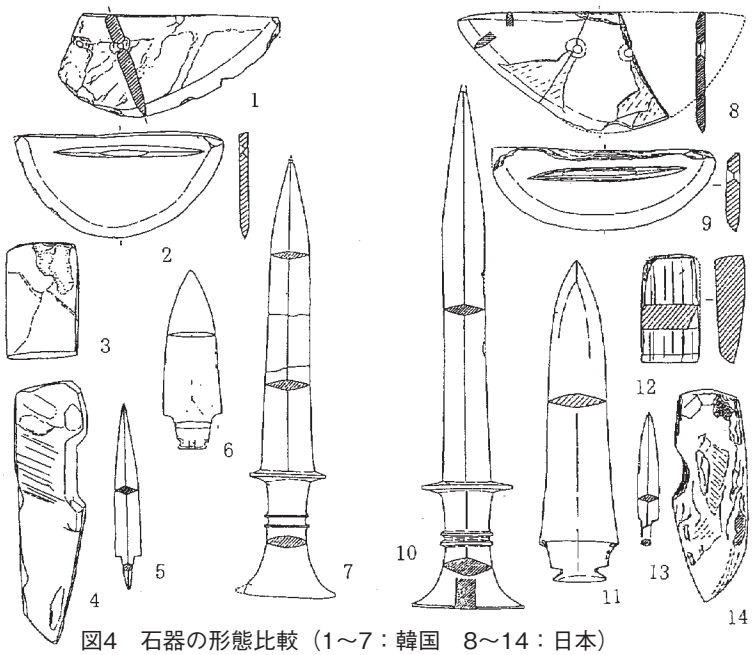


図4　石器の形態比較（1～7：韓国　8～14：日本）

1 松菊里 55-6 住　2 慶南泗川　3 松菊里 55 - 1 住　4 松菊里 55 - 5 住　5 松菊里 1 号石棺
6 全南滄浪里 6 号支石墓　7 京畿上紫浦里 1 号支石墓　8 板付　9・11～14 菜畑　10 対馬金幕

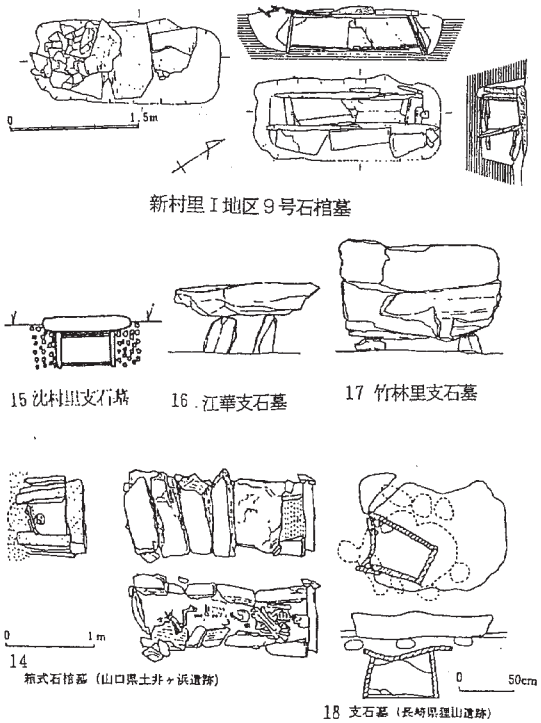


図5　日韓の墓

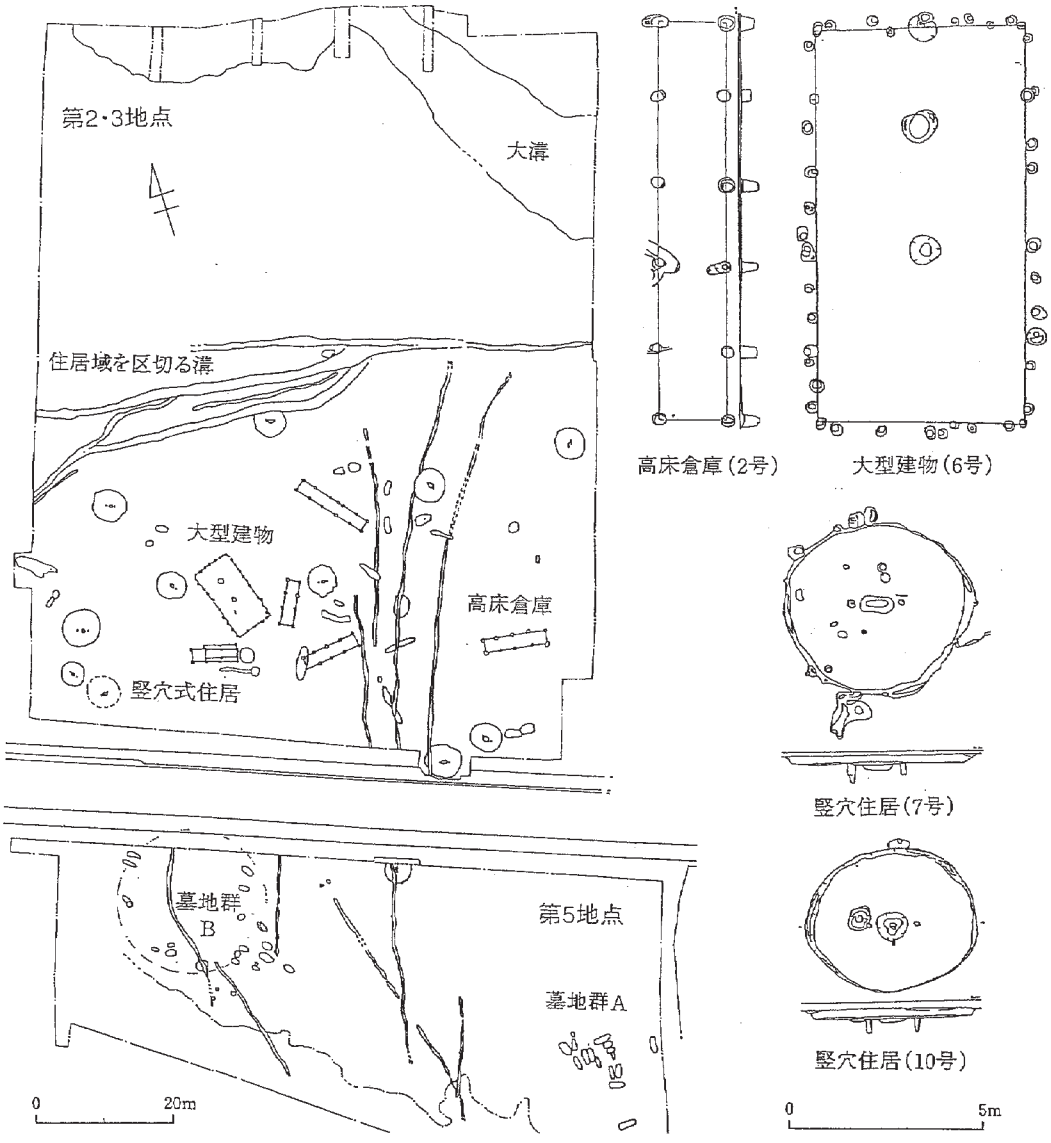


図6　江辻遺跡と建物

式に由来する土器（図3）や製作技術が見られ、収穫具（磨製の石庖丁・石鎌）、木器や杭・板材をつくるための工具（抉入石斧･扁平片刃石斧）、武器（有柄式や有茎式の磨製石剣、磨製石鏃）などの新しい道具（図4）、新しい墓（支石墓、箱式石棺墓、木棺墓）など（図5）も半島南部の無文土器中期の文化に由来し、総体的に受け入れられたことがわかる。集落も、縄文時代にはなかった溝で囲む環溝集落[3]が出現する。福岡県粕屋町江辻遺跡が内部構造も分かる例（図6）で、朝鮮半島由来の松菊里型住居が溝の中につくられる。溝の中の人と溝の外の人、あるいは溝の中の人と溝の外の自然との関係が断ち切られ、自然は人間生活のための素材・資源となった。

福岡市板付遺跡Ｇ－7a･7b区で1977年から78年にかけて調査された弥生時代早期の水田（図7）は、台地の西側を南から北に流れる幹線水路の西側につくられ、幹線水路に直交する堰と、幹線水路の西隣に平行する排水路をせき止める堰、水田の水口に設けられた堰という三重の堰で取水し、秋にかけて水田の水が不要になれば堰を開いて排水する取排水施設を備えており、整備された水田であった。また、堰や畦には大量の板や杭・棒が使われ、新しい工具の用途を示す。

かつては、この時期に渡来した無文土器人による縄文人駆逐説もあった。しかし、文化と人はなかなか一致しない。例えば、福岡県糸島市新町遺跡の早期の支石墓は渡来系の墓だが、そこから出た９号人骨（熟年男性）は明らかに縄文人的で、眼窩の高さだけが渡来人的である（田中良之 1991）。さらに、早期初の石器には無文土器系の石器が目立つがその量は少なく、縄文石器にないものが選択的に受け入れられ、多数の縄文系石器の中でしだいに量を増す。無文土器が過半数を占める集落や集落の中の地区もない。北部九州の玄界灘沿岸地域で在来の縄文人と渡来無文土器人は共存して混血し、弥生人となって新しい時代の幕を開け、高い人口増加率で西日本一帯に広がったとみられる。

また、朝鮮半島南部の無文土器は、前期後半の欣岩里式では壺の頸が外に開き、中期前半の休岩里式では頸が直立する。そして中期後半の松菊里式では、頸が内傾する。休岩里式の甕は口縁が内屈し、松菊里式ではゆるやかに外反する（図３左側）。日本では、弥生時代早期の初め頃の壺は小壺も含めて頸が直立して、それから前期前半にかけて段々と内傾する。甕も少し内屈する形から、松菊里式のようにゆるやかに外反する甕に移行する（図３右側）。つまり、朝鮮半島の無文土器の流れと、弥生時代早期から前期初めの弥生土器の流れは、ある程度連動する。これは弥生時代早期から前期初頭に朝鮮半島からの流入が継続したことを示す。１回だけ１個の集団がやって来て、それでいきなり弥生時代の農業が始まって拡散するようなビックバンモデルではない。相互の交流が継続し、長い時間をかけて行ったり来たりする中で、徐々に弥生時代の農業社会が形成されたと考える。この時期が、朝鮮半島と日本列島、九州北部と朝鮮半島南部が一番密

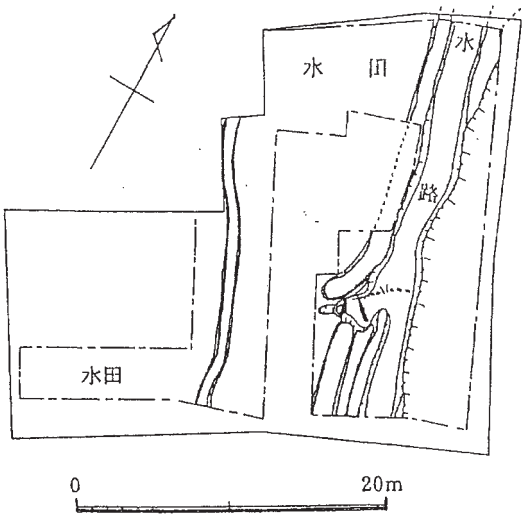


図7　板付遺跡の水田

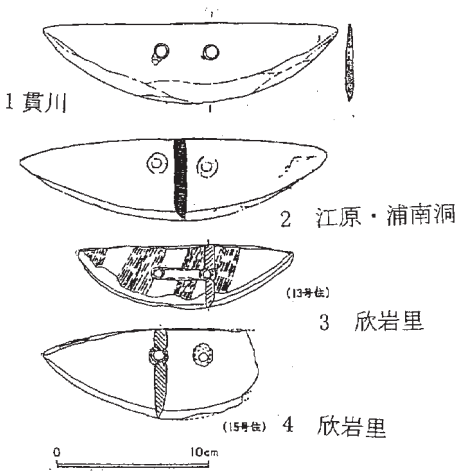


図8　日韓の長舟形石庖丁
（1：日本　2～4：韓国）

接な関係を持っていた。

北九州市の貫川遺跡からは、弥生時代早期に定着した無文土器時代中期の半月形の石庖丁とは異なり、無文土器時代前期にみられる細長い長舟形石庖丁（図８－２～４）と同様な石庖丁が、縄文時代晩期後半の黒川式土器に伴って出た（図８－１）。この遺跡では、朝鮮半島の無文土器時代前期後半の欣岩里式に由来する孔列文土器も、黒川式土器ともに出ている。遺跡は低湿地にあり、これは無文土器時代前期後半の水稲農業文化が渡来したが、定着には失敗した証拠と考えている。ただし定着に失敗はしたが、それによる変容が、次の無文土器時代中期の農業文化が受容され定着する下地をつくったとみられる。

また、この時期にわずかではあるが、朝鮮半島でも弥生系土器が慶尚南道昌原市網谷里で出土した。早期前半の夜臼Ⅰ式系の深鉢だが、器面調整には無文土器の技法が見られ、現地製と考えられる。この時期は朝鮮半島から日本列島への流れが圧倒的だが、逆の流れもあった。

4　国の形成－後期無文土器人たち－

⑴　国の形成と後期無文土器人

弥生前期末以降、列島では平野や盆地・河川流域を単位とする政治組織が本格的に形成され、中国の史書はこれを「国」と記す。国形成の手がかりはこの時期に出現する朝鮮系細形青銅武器類（細形の剣・矛・戈と鈕が２個ないし３個ある多鈕細文鏡）である。弥生前期末～中期前半の福岡市早良平野では、朝鮮系青銅器は圧倒的に吉武遺跡に集中し、ほかの拠点集落では多くは１～２点である。朝鮮半島ではこれらの細形青銅武器類やその前の遼寧式銅剣は日常集落域からはあまり出ず，ほとんどが墓の副葬品である。紀元前２世紀後半～前１世紀の平壌市貞栢洞１号墓からは「夫租歳君」（夫租という地域の濊族のキミ（王，公）＝首長）銀印が出て，細形の銅剣・銅矛が伴う。したがって、細形青銅武器類は首長層の墓に副葬するべき器物である。吉武遺跡ではそうした首長層を析出して、早良平野という単位地域（早良国と仮

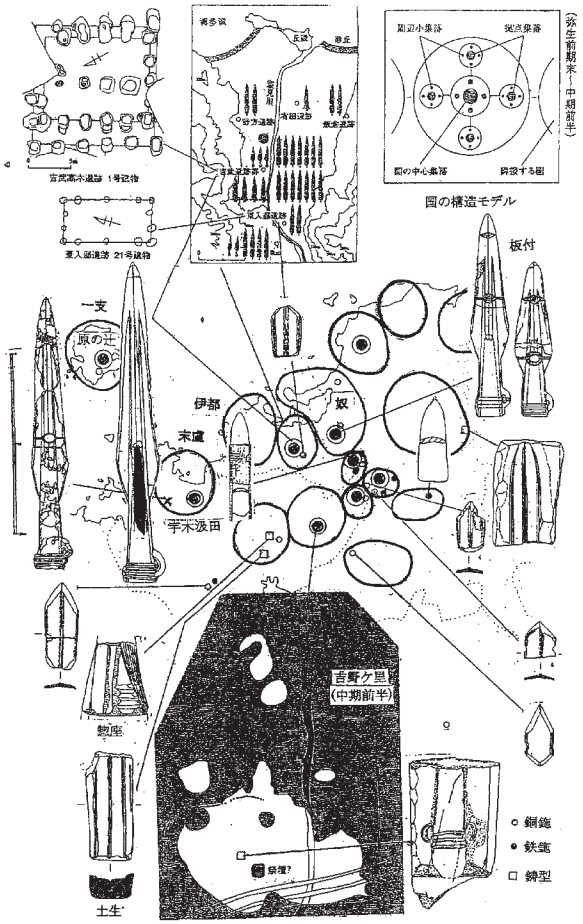


図9　弥生前半期新段階の国と中心集落、銅矛と鋳型、鉄・銅鉇

称）をまとめたのであり、そこには吉武集落－その他の拠点集落－小集落という階層序列ができた（図9）。

この時期の特徴は、後期無文土器人の集団的居住である。後期無文土器自体の流入は弥生時代の前期中ごろからで、前期末から中期前半には限られた村の一角だが、後期無文土器と、その系譜の変容した擬無文土器が、甕を主体に多量に出る。後期無文土器は、口縁部に粘土紐を貼りつける甕が指標で、前半の断面円形の甕（水石里式）と、後半の三角形の甕（勒島式）に細分される。福岡市諸岡遺跡では、1974年の調査で、弥生時代前期末の土壙18基のうち12基から合計で50個体をこえる水石里式の無文土器（甕が大多数）が出た（弥生土器は約30個体）。日本列島の遺跡なのに弥生土器よりも無文土器が多く、これらの無文土器は搬入品または忠実再元品である（図10上）。土壙からは焼土も出て、煮炊き用の甕が多数を占め、無文土器人集団の居住区といえる。ただし、擬無文土器はなく、時期も単一で、石器もほとんど出ず、一時期の居住である。弥生人と近接し、交流はもちながらも同化しない、あるいは、長く定住する際の初期で終わった様相ともいえる。これを諸岡型と呼ぶ。

いっぽう佐賀県土生遺跡では前期末～中期前半の弥生土器とともに、少量の無文土器と多くの擬無文土器が出た（図10下）。主要な器種がそろって甕が多く、前期末～中期初頭の古段階と、中期初頭～前半の新段階にわかれる。新段階の擬無文土器には弥生土器の要素が多くて無文土器の要素はわずかな例まである。これは、無文土器人の集団がこの地に長く居住し、地域社会に深く入り込んで同化する過程のあらわれである。これを土生型と呼ぶ。諸岡型が長期居住した場合で

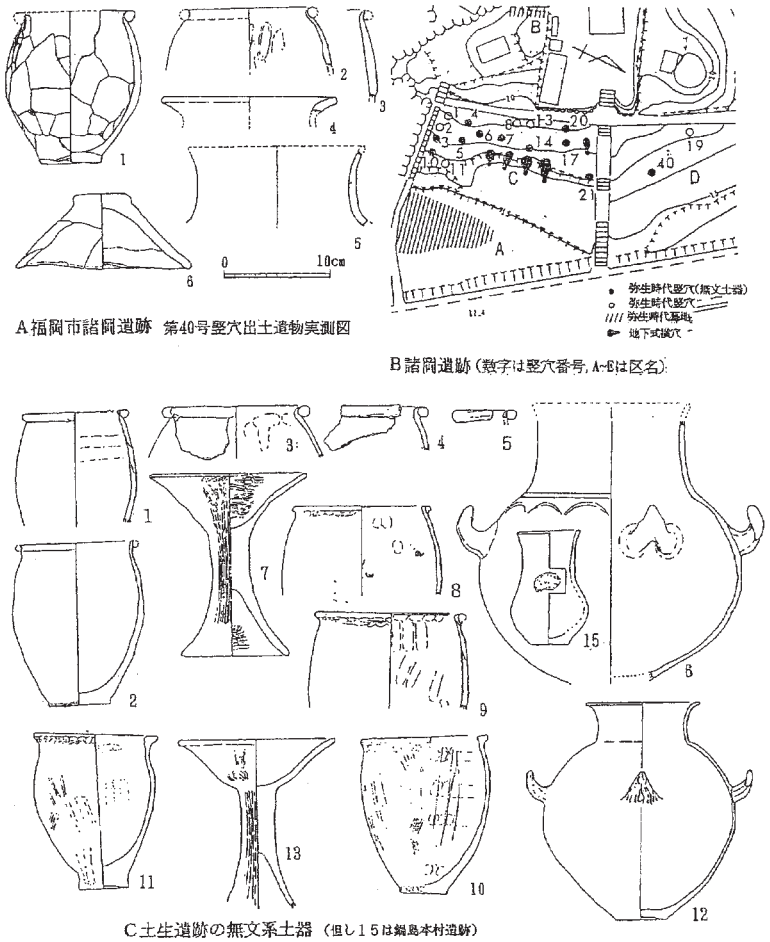


図10　日本の後期無文土器

もある。

原の辻遺跡では中期前半に環溝よりも西外側の低地、八反地区に大陸系の敷粗朶工法で船着場がつくられた。そこから北側に隣接する不條地区には、弥生前期後半から中期後半に、水石里式系および勒島式系の無文土器・擬無文土器が集中し、土生型の様相を呈する（図 11）。重要なのは水石里式系だけでなく勒島系の無文土器・擬無文土器もみられる点で、半島南部の後期無文土器人の継続的な渡来・集住を示す。かれらが中心部から制御された面は確かにある。しかし、集落の中心部に入ってその論理にからめとられることを避けて、あえて周縁部に住み、故地との交流回路を維持しながら，船着場の築造、さらには一支国の対外交流を主導して，国づくりに関わる形で周縁から中心部を制御した面も同時にあったとみられる。

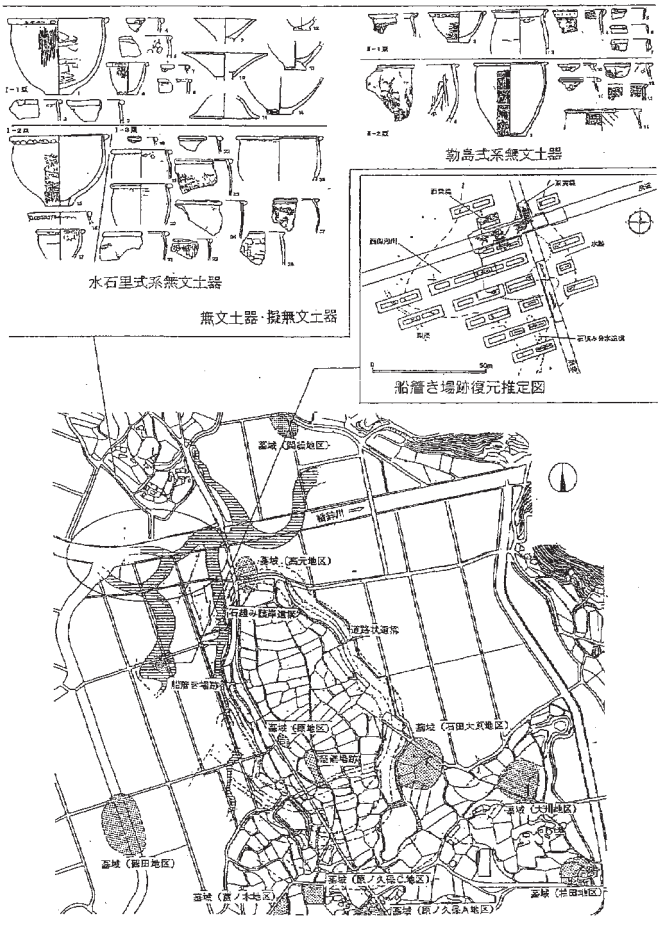


図11　原の辻遺跡

熊本市八ノ坪遺跡の青銅器製作地区も、拠点集落の中心部ではなく周縁部にあり、弥生時代中期前半の無文土器・擬無文土器が集中する（図 12）。八ノ坪遺跡の周辺では前期中ごろにさかのぼって円形粘土帯無文土器がみられるが、青銅器の鋳造資料は共伴しない。いまのところ日本列島では、円形粘土帯土器人が集住した前期末までの遺跡で、青銅器を製作した痕跡は認められない。土生遺跡でも青銅器の鋳型は弥生中期前半が中心年代である。現在の韓国での発掘状況をみても、円形粘土帯土器の時期の集落はあるが、青銅器工房と推定できる地区はこれまでほとんどなく、青銅器製作の技術を身につけた工人は極めて限られた存在であったとみられる。したがって無文土器人でも誰もが青銅器を製作はできず、故地との交流回路を維持する中で、この時期になってはじめて青銅器製作工人を招来できたと見られる。こうした様相は、渡来人の定着と新技術の導入に時間差があることを示す。

円形粘土帯無文土器人の集団的な渡来の理由については、これまで倭人の立場からの理由、つまり金属器の製品・原料や製作技術、あるいは政治的な権威（古朝鮮の権威）の獲得を考えてきた。しかしそれと同時に、無文土器人の立場からすれば、無文土器人の故地と同様な構造をもつ

社会を作り、自分たちの世界と交易先を広げる目的があったとみられる[4]。

(2) 朝鮮半島南部での弥生前半期新段階の弥生系土器と弥生人

朝鮮半島南部でも、弥生時代中期初頭から前半をピークに、金海・釜山圏域、泗川圏域、蔚山圏域の三地域で弥生人の集住が見られる（図 13）。これまでは泗川圏域の勒島遺跡で中期初頭から後期初頭の弥生系土器が大量に出土して、もっぱら注目されてきた。勒島遺跡の弥生系土器は北部九州でも玄界灘沿岸の遠賀川以西系が主体で、それも甕がかなりあって、弥生人の集団的居住が想定される。時期は弥生中期後半の須玖Ⅱ式期が盛行期だが、弥生中期初頭の城ノ越式から中期前半の須玖Ⅰ式土器もかなり見られる。また、この弥生中期初頭から中期前半期の土器には北部九州系のほかに、豊後の下城式の大型壺や肥後の黒髪式土器、長門から周防の内折口縁壺があって、交流範囲が広いことがわかる（図 14）。

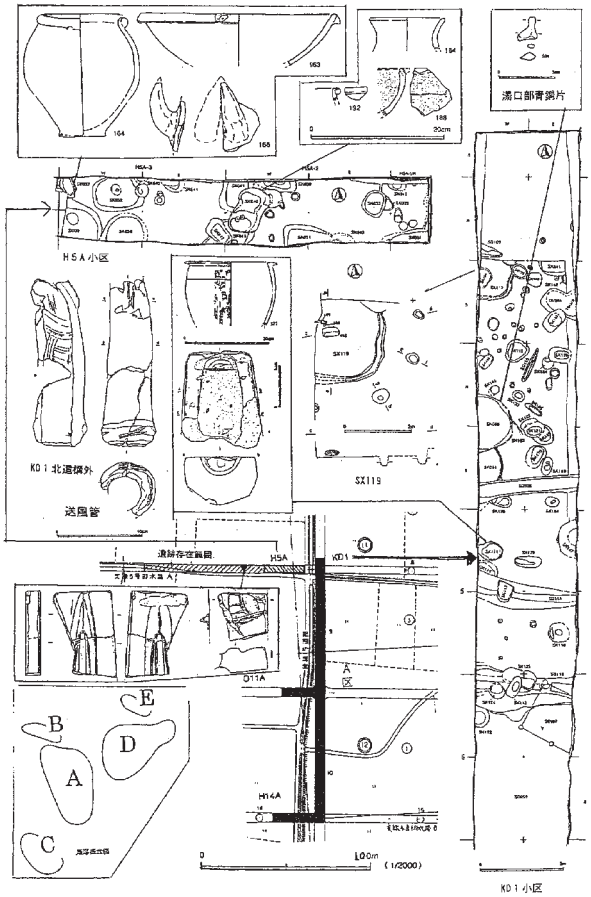


図12　八ノ坪B地区の遺構と遺物

また、西北九州を中心にみられる鯨骨製アワビおこしと、それを材質転換して製作した鹿角製アワビおこしの存在からみて、渡来弥生人の主体は玄界灘沿岸地域の水人であった。ここでは擬弥生土器や擬無文土器もあり、弥生人の渡来と居住時期は長期に及んだであろう。ただし、弥生時代中期の甕棺はわずかに存在するが、墓に使用された弥生甕棺はないし、弥生系土器の量は全体の 1 割にもならない。

この時期の交流の中心は金海・釜山圏域で、金海地域に弥生系土器が集中する（図 15）。戦前から有名な金海会峴里貝塚では、弥生前期末～中期初頭に相当する金海式甕棺 3 基[5]（図 16 下左）を榧本杜人が発掘している（榧本杜人 1980）。2005 年の平面積わずか 60.2㎡の発掘では、中期初頭～前半の弥生系土器 6 点が出ていて（図 16 右下の 704・941・1469・1666・1716 など）甕の比率が高く渡来弥生人集団の存在を示す。

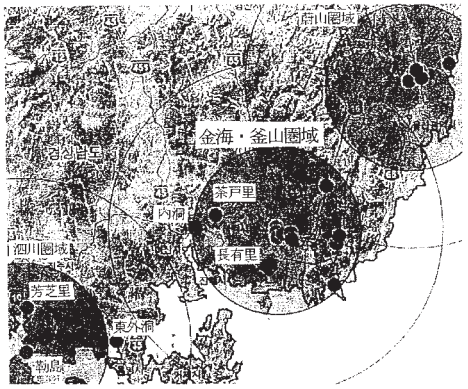


図13　嶺南地域の弥生系土器出土遺跡

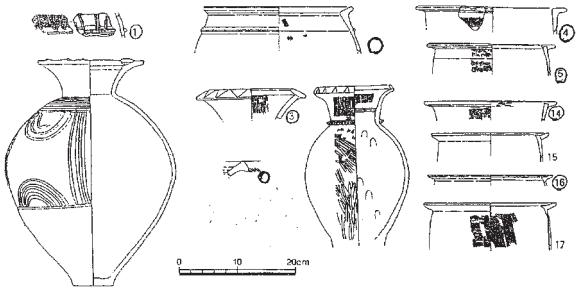


図14　勒島遺跡の弥生系土器(丸囲み)

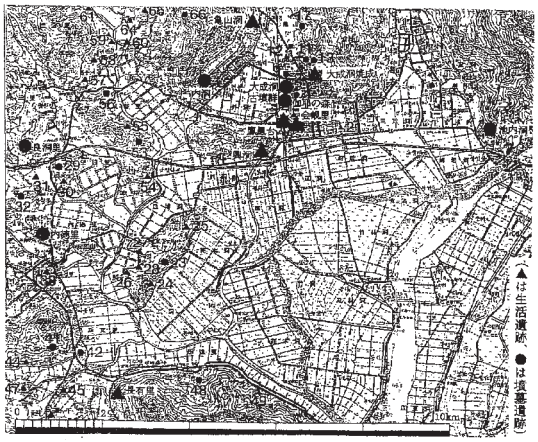
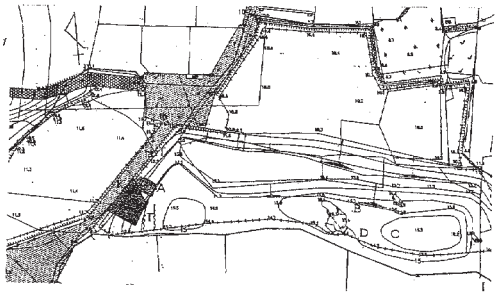


図15　金海市域の弥生系遺物出土遺跡
（大きな黒丸と黒三角）



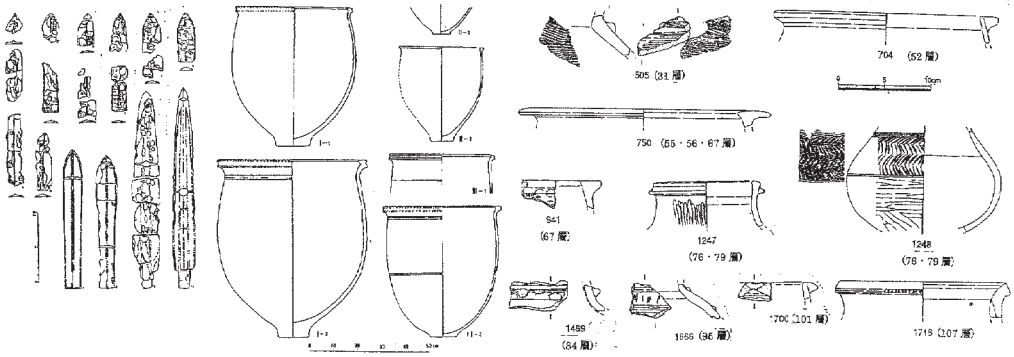


図16　金海会峴里貝塚の全体図(上）と戦前の出土品(下左）、近年出土の弥生系土器(下右）

さらに、慶尚南道金海市亀山洞遺跡では、弥生時代前期末～中期前半の弥生系土器が出土土器全体の７～８割を占めて弥生人が集住する地区が存在する。搬入ないし忠実再現された弥生土器と、変容した擬弥生土器の両者が各時期にあり、継続的な渡来があったと認められる。出土した鉄器類からみて、かれらが渡来した目的は鉄・鉄器の獲得にあった（図 17）。

一方、蔚山地域では弥生中期初頭から中期前半の弥生系土器がいくつかの遺跡でまとまって見

られ、甕が圧倒的に多くて、渡来弥生人の存在を示す（武末純一 2013c・2015b）。注目されるのは泗川圏域や金海・釜山圏域に比べて、同じ城ノ越式から須玖Ⅰ式土器でも、遠賀川以東系とされる九州東北部の弥生系土器の比率が高い点である。これは、壱岐・対馬を経由するいわゆる『魏志』倭人伝ルートとは異なり、九州東北部と朝鮮半島東海岸地域との交流を物語る。

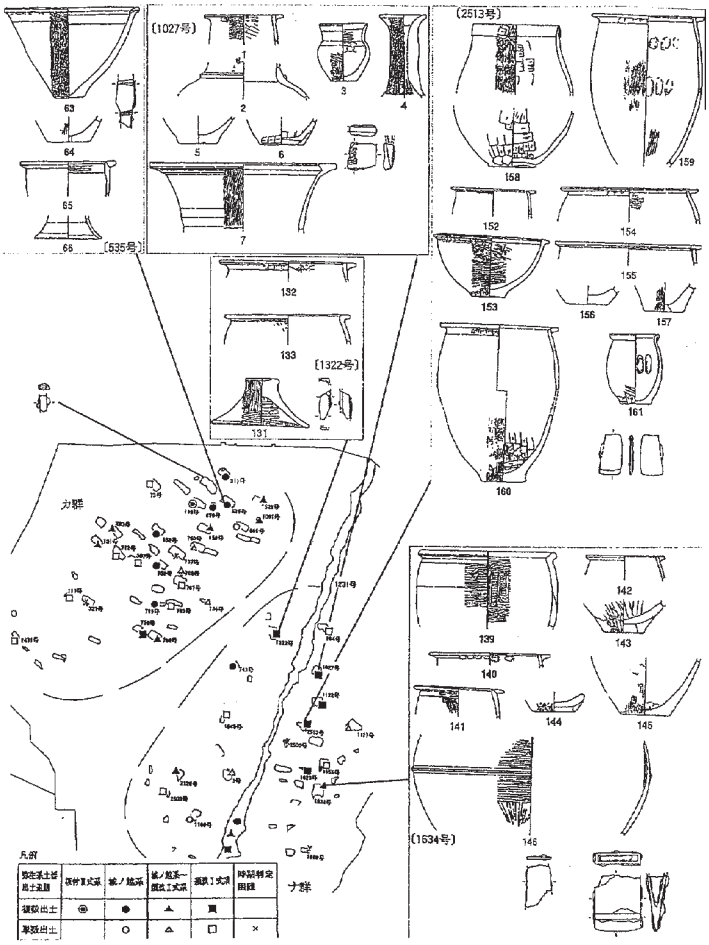


図17　金海亀山洞遺跡の弥生系土器出土遺構

これまで述べてきたように、日韓両地域でややピークにズレはあるが、弥生時代前半期新段階にはそれぞれの地域からの渡来人の集団的な居住地区が、両地域の集落遺跡で見られる。ただし、それぞれの集落に伴う墓地での故地の墓葬や渡来土器の副葬例はあまり見られない。渡来人の墓地は別にあった可能性や、墓には渡来系土器を副葬しない風習ないし規制が存在した可能性のほかに、一定期間定住するがここで一生を終えない人々、つまり「往来する渡来人」の可能性も出てくる。こうした点で金海式甕棺３基は、この時期に日朝両地域でみても、渡来人の故地の墓葬が再現された稀有な例となる。しかも、３号甕棺には細形銅剣２点と銅鉇８点が副葬されているため、これをどう評価するのか、被葬者が渡来人なのか在来人なのかなどは、改めて慎重に検討するべき課題となってくる。

5　楽浪・三韓との交易－海村と文字の使用－

(1)　海村の設定

弥生時代の後半期の北部九州では、中期後半（紀元前１世紀後半）になると、奴国や伊都国が国々の上に立つようになり、国邑はさらに大きくなって、円形の溝で全体を囲った中に一部の人々（首長層）が住むための方形区画ができ、王が出現する。奴国と伊都国の王墓は、福岡県春日市

須玖岡本Ｄ地点（通称）の甕棺墓と福岡県前原市三雲南小路の２基の甕棺墓で、これらは30面前後の完形の中国前漢鏡や、天のシンボルである璧（ガラス製）をはじめ多くの副葬品を独占する。三雲・井原遺跡南小路１号甕棺墓の金銅製四葉座飾金具（木棺の飾金具）は、東夷の王の証拠で、東西32ｍ×南北31ｍの正方形に近い墓域が溝に囲まれた墳丘をもつ。須玖岡本の王墓も同様な墳丘墓である。

しかしながら、弥生時代の集落は農村だけではない。

弥生時代になると、海と山が一体化していた縄文世界に農村が割って入り、数は農村に比べると圧倒的に少ないが、漁村と山村もできる。しかも漁村の中からは、海上交易活動を主体とする海村も、弥生時代中期にはあらわれた。

すべての集落遺跡の中から海村や漁村・山村を抽出する目安は，石庖丁の数量である。海村の典型例は福岡県糸島市御床松原遺跡で、隣接する新町遺跡も含む。弥生時代から古墳時代にかけて石錘が異常に多く，鉄製の釣針やアワビおこしもあり，網漁の比重が高くて，潜水漁法も行う（図18）。また、板状鉄斧や鉄素材、楽浪土器、中国銭貨など、海上交易活動を示す遺物も出ている。

ここからはイネの穂摘み具である石庖丁が出るため、農業もした。しかし、その石庖丁の数量（12点）自体は、同時期の竪穴住居の数と発掘面積がほぼ同じで、農村である佐賀県鳥栖市安永田遺跡の石庖丁の数量（63点）のおよそ5分の1なので，農作業の比率もその程度であったといえる。しかも安永田遺跡は銅鐸や銅矛を鋳造しており、純粋な農村ではないから、純粋な農村と比べると農作業の比率はさらに低くなる。

したがって，御床松原遺跡のように，周囲の遺跡よりも漁撈具の比率が高くて海上交易品が出る沿岸部の漁村は，海村と見てよい。地理環境や『魏志』倭人伝の「南北市糴」の記述から見て海上交易活動の比率が

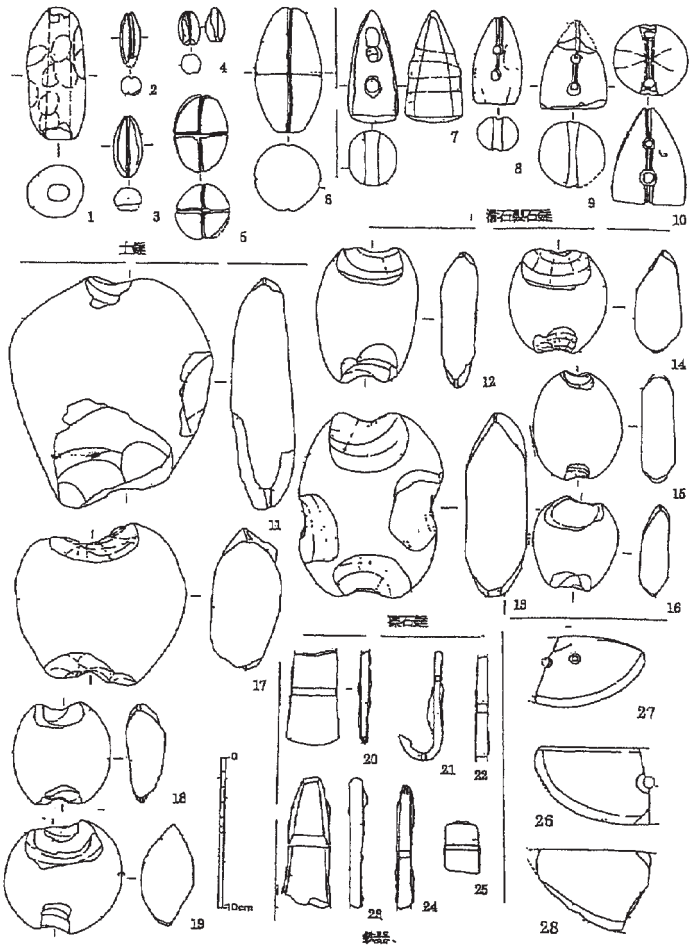


図18　御床松原遺跡出土遺物

高い対馬でも，これまで石庖丁はほとんど出ておらず，島全体が海村で占められた。壱岐では原の辻遺跡とカラカミ遺跡が代表例である。

海村からは、さまざまな中国・韓国系の遺物（板状鉄斧、原料鉄・鉄素材、三韓土器、楽浪土器、中国銭貨など）が出土する。東アジア世界の交易網に組み込まれて漁村が海村となり、これらの海村は原の辻遺跡を除いて国邑よりもはるかに小さい規模であった。

⑵　茶戸里１号墓

これまで弥生時代の文字使用は、政治的な外交交渉の場での使用が考えられてきた。

これに対して、1992 年に交易の場での文字使用という新たな視点が韓国の考古学界で、韓国慶尚南道昌原市の茶戸里１号墓出土資料を根拠に李健茂氏から提示された。茶戸里１号墓は、韓国の三韓時代（原三国時代）初期（紀元前１世紀）の墳墓である。李健茂氏は、墓の底面の中央に設けられた楕円形の穴（腰坑）の中に置かれた竹籠から出た筆５本，鉄製素環頭刀子（書刀または削刀）１点，砝碼（両皿天秤の錘＝天秤権）３点、五銖銭３枚などの文房具系の遺物（図 19）をとりあげて、文字使用を推定した（李健茂 1992）。

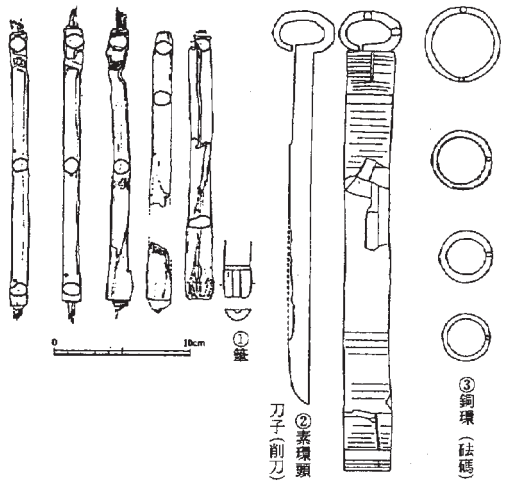


図19　茶戸里1号墓の文房具系遺物

５点の筆は、出土した当時、化粧や漆を塗る際に使われたとする説も提起された。これに対して李健茂氏は、中国の戦国時代から漢代の筆と茶戸里１号墓の筆は、ともに筆の軸の一端に孔をあけて筆毛の根元を糸で縛って挿入し、さらに縛った糸から２本を抜き出して、筆軸両側の小さな孔から１本ずつ外側に通して筆軸に巻きつけ、漆で固める点が共通することや、長さの平均はいずれも漢代の１尺にあたる 23cmであり、後漢の王充が著した『論衡』の「知能之人、須らく三寸之舌、一尺之筆」という記述では「三寸之舌」が弁舌さわやかであること、「一尺之筆」が文章をよく書くことを意味するので、茶戸里一号墓の筆は筆記用になると論証した。

重さを量る際の錘である天秤権は、４点の銅環（大（a）１点・中（b・c）２点・小（d）１点）が候補となり、重さは小が 5.20 g、中が 10.25 g と 11.55 g、大が 22.73 g で倍々（２の累乗倍）の重さとなる。そして、中のうちのどちらか１点は青銅の帯鉤の環となるため、大・中・小が１点ずつの組み合わせとなる。中国では天秤権は 10 点一組で２の累乗倍の重さとなり、天秤と一緒に出るので、天秤権と考えられている。10 点を組み合わせて使うと、いちばん軽い天秤権の重さを１単位とした場合、１から 512 単位までの権を組み合わせて、1023 単位までのすべての重さを量れる。

木簡の表面を削って誤字を訂正し、いまの消しゴムの役割を果たしたのが削刀で、書刀ともいう。茶戸里一号墓の鉄製素環頭刀子は、木に漆を塗った鞘の平面形と断面形が共に長方形で、素環頭部を除いたすべてが鞘に入り込み、柄と刀身の区別は不明瞭である。こうした特徴は、中国

で筆と共伴した削刀（銅製素環頭刀子）と材質を除いて特色が一致し、やはり削刀である。

五銖銭は重さが五銖（一銖が0.67 gなので3.35 g）ある円形方孔の銭貨で、漢代の銭貨は重量が単位の称量貨幣であった。また、茶戸里1号墓では大型板状鉄斧や鋳造梯形鉄斧も出ている。大型の板状鉄斧は、刃がついたものの他に刃がつかないものもあり、後者は鉄器をつくるための素材であった。さらに、銑鉄でできた鋳造梯形鉄斧には、鉄斧の中空の部分をつくるために鋳型の中に設置された中型がそのまま残って2点1組をさし合わせにして紐で十字に縛った状態で出たものもあり、溶かして鋼に変えるための原料鉄とされた。そして、これらを総合した李健茂氏は、「鉄の地金で中国の漢や楽浪と交易し、内訳を筆で記録して、削刀で文章を訂正し、代価の銭を天秤と権（砝碼）ではかる」被葬者像を描き出した。

この茶戸里1号墓ではそうした文房具と共に、北部九州と関係が深い中細形銅矛c類が竹籠から出ており、1号墓の付近からは弥生時代中期後半の弥生土器も出たので、日本列島との交易でも文字を使用した可能性が提起されたことにもなる。

(3) 楽浪土器

北部九州で海村と結びつきが強い遺物の一つに、楽浪土器がある（図20・21）。

楽浪土器は帯方郡の土器も含めた呼称で、特徴的な器形と製作技法が見られる。多くは瓦質かつ青灰色の土器で、還元焔で焼き上げられ、酸化焔で焼き上げられた赤褐色の弥生土器とはまったく異なる。楽浪

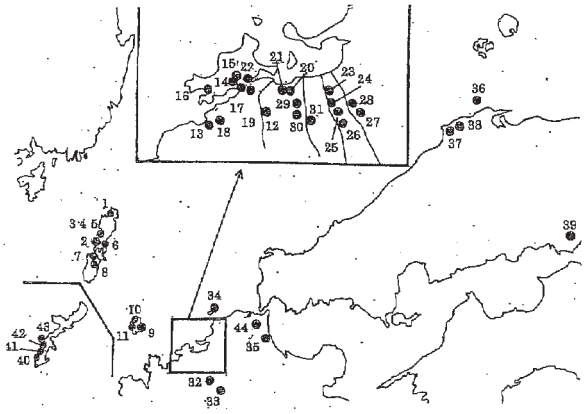


図20　日本列島の楽浪系土器分布図

1 経隈、2 木坂、3 三根、4 大田原ヤモト、5 瀬のさえ、6 鏡音鼻、7 小式崎、8 白遊江浦、9 原の辻、10 カラカミ、11 戸田、12 三雲、13 潤江井半田、14 一の町、15 ウスイ、16 御床松原、17 潤地頭給、18 石崎曲り田、19 浦志井尻、20 今宿五郎江、21 大塚、22 元岡・桑原、23 博多、24 比恵、25 那珂、26 高畑、27 下月隈C、28 雀居、29 東入部 30 コノリ、31 吉武、32 立明寺、33 ヘボノ木、34 ろくどん、35 十双、36 鹿島海揚り、37 山時、38 青木、39 門前地、40 嘉門貝塚、41 荒地原、42 大久保原、43 中川原貝塚 44 城野

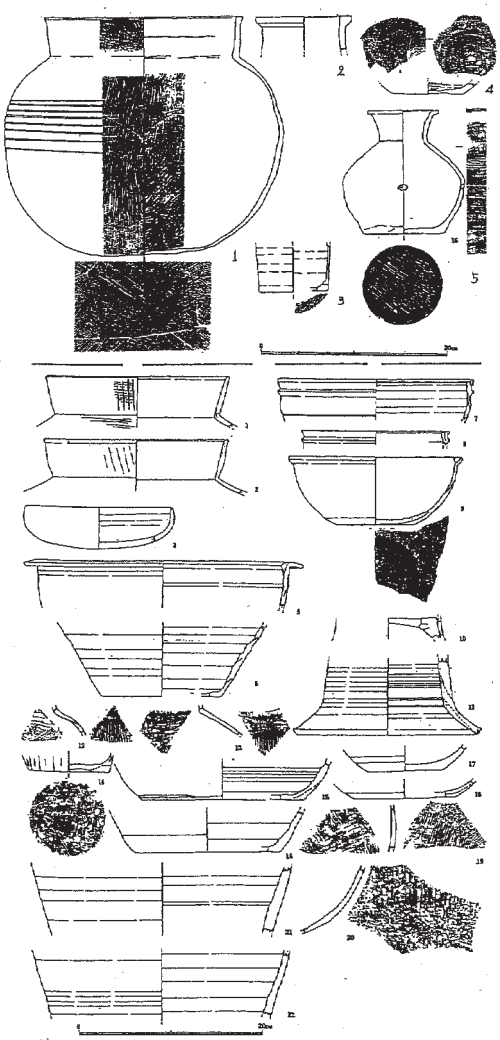


図21　北部九州の楽浪系土器　上：原の辻・カラカミ　下：1～20三雲番上　21・22御床松原

土器は底を糸で切り離しており、静止糸切りと回転糸切りがある。同じ時期の朝鮮半島南部の三韓地域で製作・使用された還元焔焼成で瓦質かつ青灰色の三韓土器にも（図22)、弥生土器にない技法が使われたが、糸切りはない。また、焼くときに胎土の中に空気が入っていると破裂するため、内側に当て具を当てて羽子板のような板に細い縄を巻きつけて外側から叩き締める。内面にはその当て具の痕があり、楽浪土器ではそれが同心弧になる。三韓土器の場合は、楽浪土器と器形が異なるだけでなく、この当て具の痕が同心円になり、区別がつく。

日本列島で出土する楽浪土器の中には、滑石を入れた炊事用の土器（植木鉢形土器など）もあるので、実際にそれを使って炊事をする楽浪人もいたと思われる。これらの楽浪土器の遺跡でのあり方は、1遺跡に1～2点程度の対馬型，3点以上だが遺跡全体に散漫に分布する原の辻型，遺跡内の一区画に集中する三雲番上型の三つに分かれる。

対馬では朝鮮半島南部の三韓土器が圧倒的に多く、対馬型は対馬と韓半島南部との日常的な交流を示し、対外交渉の基層をなす。

原の辻型は対馬以外の北部九州の海村の特徴で、海村世界での交易は対外交渉の中層をなす。原の辻遺跡が典型例（図21上）で、全体的に散漫に分布するとともに、器種が豊富で、対馬に比べると三韓土器の量にかなり近い点が特徴である。

番上型の三雲・井原遺跡番上地区ではⅡ－5区土器溜から、88㎡の調査区で数十点ほどの楽浪土器片が出土した（図22下)。実際の個体数は15点前後であろうが、ほかに番上Ⅱ－6区や隣接するサキゾノ地区でも楽浪土器が出て、この一帯に集中するとともに、それ以外の地区ではほとんど出ない。国邑の中央部の狭い範囲から集中出土し、器種も鉢、盆、短頸壺、筒坏ほかに器台などもあってセットがそろう特徴から、楽浪人の居住を示すと考える。番上型は初期筑紫政権と中国大陸・朝鮮半島の政権との外交交渉という対外交渉での最上層の様相を示し、居住していた楽浪人が、外交文書の作成などに関わったと想定できる。

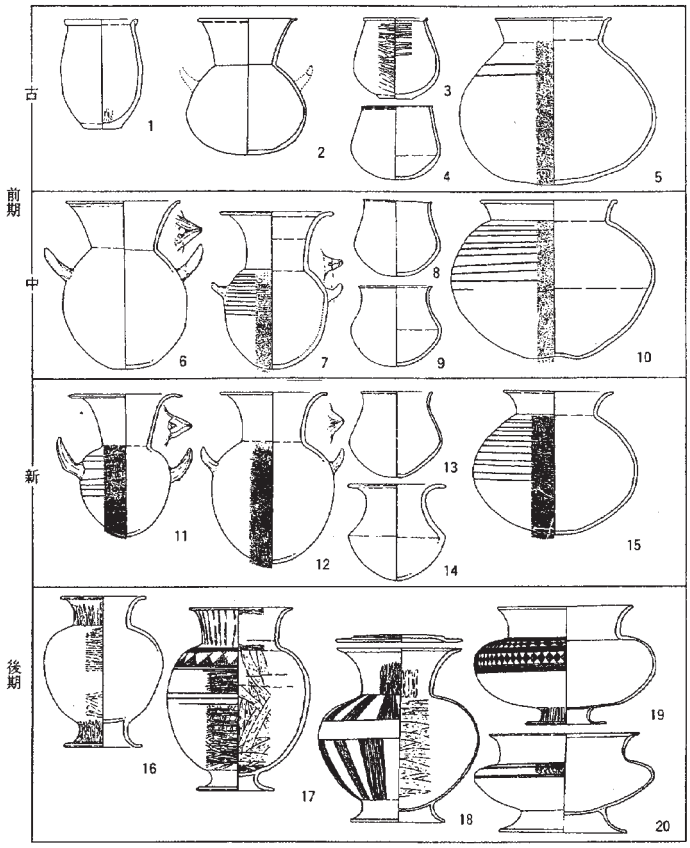


図22　三韓土器の変遷

(4)　中国銭貨

日本列島で出土した主な中国銭貨には半両銭，五銖銭，貨泉があり，海村を中心に日常生活域から出る場合と、墳墓の副葬品とに大別される（図 23)。副葬例は内陸部に多く、三点までが大半である。海村では、原の辻遺跡 16 点（五銖銭 1 点、大泉五十 1 点、貨泉 11 点、不明銭 2 点)、御床松原遺跡（隣接の新町遺跡を含む）は 6 点（半両銭 2 点、貨泉 4 点)、元岡遺跡は 9 点（五銖銭 1 点、貨泉 8 点)、今宿五郎江遺跡（隣接の大塚遺跡を含む）は貨泉 5 点、楽浪系土器はな

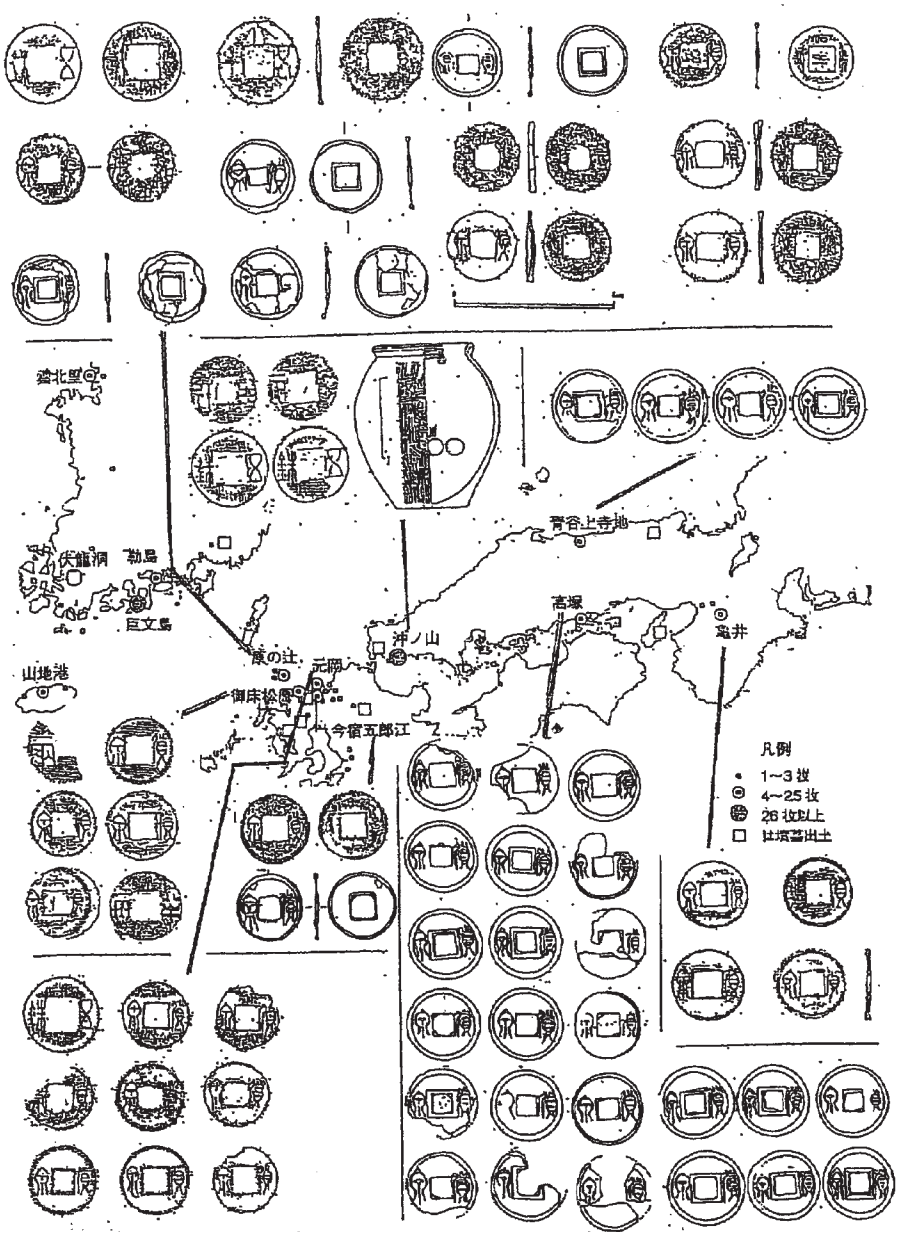


図23　日韓の中国銭貨(弥生時代後半期～古墳時代前期)

いが鳥取市青谷上寺地遺跡は貨泉４点であり、生活域から４点以上が出る。ほかに岡山県高塚遺跡では貨泉 25 点、大阪府亀井遺跡でも貨泉４点が知られ、この２遺跡は海村ではないが、いずれも海辺の遺跡で、海村に準じた役割を交易で果たしたとみられる。重要なのは、海村の多くが原の辻遺跡を除くと国邑ではなく小規模な集落であるとともに、国邑やそれに準ずる集落では三雲・井原遺跡０点、須玖遺跡１点、吉野ヶ里遺跡１点、比恵・那珂遺跡０点、唐古・鍵遺跡０点など、ほとんど皆無な点である。つまり同じ中国製品であっても、完形中国鏡の場合と異なり、国邑は中国銭貨をほとんど保有していない。これは楽浪土器も同様で、多くは海村の日常生活域で出ており、国邑や、それに準ずる大きな拠点集落の墓では、原則的に出ない。

海村の中国銭貨は生活域から出て生業に関わる器物なので、海村の主要な二つの生業のうち、漁撈ではなく海上交易活動での対価に用いられたことになる。中国銭貨の弥生青銅器原料説も根強いが、弥生時代後半期の鋳型は、海村では皆無か少数で、銅滓や中子、るつぼ、溶解炉、送風管などの鋳造関連資料もない。逆に多数の鋳型や鋳造関連資料が出た須玖、唐古・鍵、比恵・那珂遺跡では中国銭貨はほとんど出ない。

また、後漢の五銖銭が中国や楽浪では流通するのに日本にあまりないことを問題視する意見もあるが、朝鮮半島南部も日本列島と同様に貨泉が卓越し、日本列島のみの現象ではない。最近の研究では、中国本土での後漢の五銖銭のありかたも、墳墓では後漢の五銖銭が多いが、穴蔵に埋蔵した窖蔵銭は貨泉が主体で、貨泉の価値が下落したため、窖蔵された貨泉は中国本土で使われずに朝鮮半島南部から日本列島へ流入したとされる（佐藤大樹 2015）。

山口県宇部市海岸の沖ノ山で江戸時代に採集され中国銭貨を内蔵していた

図24　韓国伏龍洞Ⅱ区域1号土壙墓の遺物

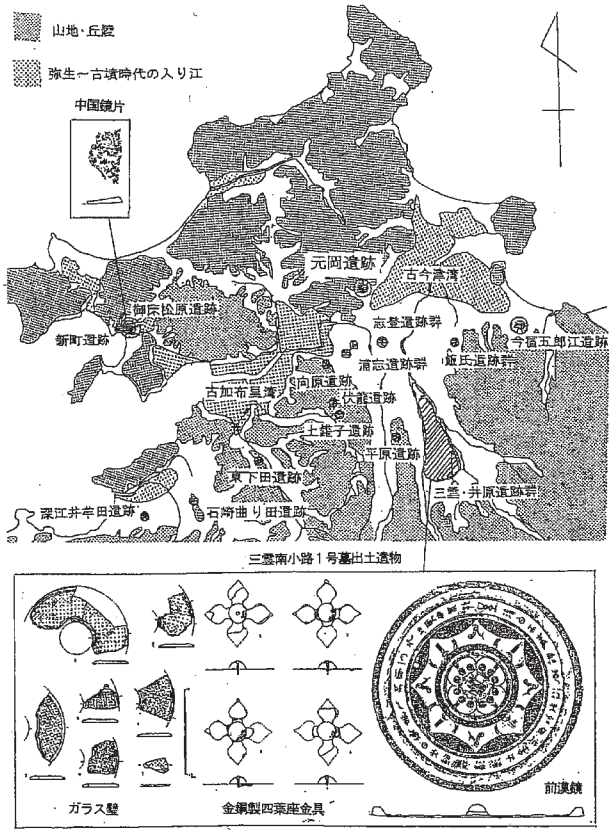


図25　伊都国の国邑と海村

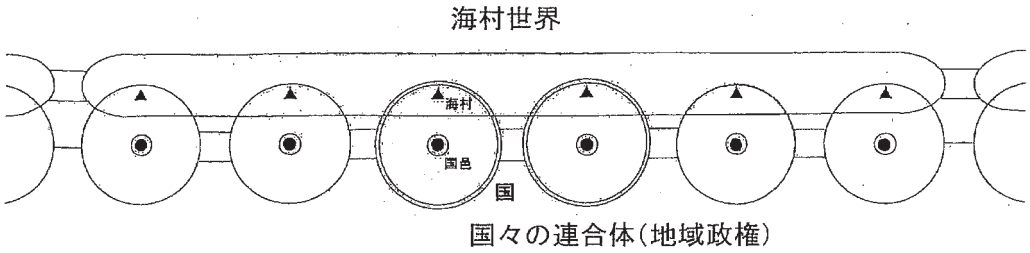


図26　国邑と海村の関係模式図

朝鮮無文土器系の甕は、弥生中期後半の時期で、中国銭貨は現在116点（半両銭20点、五銖銭96点）が残るが、甕の内面には中国銭貨の痕跡である緑青が円形に残る。この土器の模造品と10円玉を使った実験によると、痕跡のところまで10円玉を満たすためには、500枚以上が必要であるとの結論が得られた（古賀信幸・豆谷和之1995）。海村の生活域に残された中国銭貨をはるかに凌駕する量が、当時流通してことがわかる。

これは韓国でも同じである。韓国の海村である慶尚南道泗川市勒島では五銖銭・半両銭あわせて5点が出た。また全羅南道海岸部の巨文島では五銖銭980枚が採集された。近年、仁川市雲北洞遺跡5地点2号住居跡からは、紐に通した緡銭の状態、日本の中世に流通した銭貨でも用いられたような状態の五銖銭15点（別の1点と破片を含めると合計17～18点）が出た。また、東北亜支石墓研究所が2015年11月から2016年1月に発掘した光州市伏龍洞遺跡2区域1号土壙墓では、貨泉50余点が緡銭の状態で、紐に通して出た（図24）。この伏龍洞2区域1号墓は鏡や鉄器をもたないから首長墓ではなく、おそらく商人の墓であろう。日本の岡山県高塚遺跡で出た貨泉も25点がまとまって出ており、やはり緡銭の可能性がある。

中世の銭貨流通の研究では、埋蔵銭よりも個別発見貨と呼ばれて生活域で出土する銭貨に注目し、流通の度合いを、もっとも盛んなレベルⅠ、一定量流通するが限定的なレベルⅡ、ほとんど流通しないレベルⅢの地域に分ける（三宅俊彦　2008）。日韓の弥生時代の中国銭貨は、こうした区分ではレベルⅡに相当し、レベルⅡでは、決済手段だけでなく他の用途にも使われることもあった。

同じ中国製品でも中国鏡の場合は、糸島地域（当時の伊都国）に典型的なように、完形鏡は国邑に集中し，海村では御床松原遺跡のように、破片となった鏡を持てるだけである（図25）。国邑は政治権力で国の中の周縁にある海村を制御するが、楽浪郡から朝鮮半島西南海岸を経て日本列島までつながった各地域の海村は、独自の交易世界を形成して、交易活動では逆に国邑を制御した（図26）と考える。

⑸　天秤権と棹秤権

重さをはかる秤のおもりである権には、すでに述べた天秤権の他に、一本の棒（棹）に吊るしたおもりをスライドさせて平衡をとって重さをはかる棹秤に用いた棹秤権もあった。弥生時代の日本列島には天秤権（図27）と棹秤権（図28）の両方がある。

最初に知られた権は原の辻で出た青銅製の棹秤権である。現存高4.3㎝、幅3.49㎝、厚さ2.85㎝、重量150ｇの釣鐘状で横断面は楕円形をなし、頂部には半円形の鈕の痕跡がわずかに残る。側面

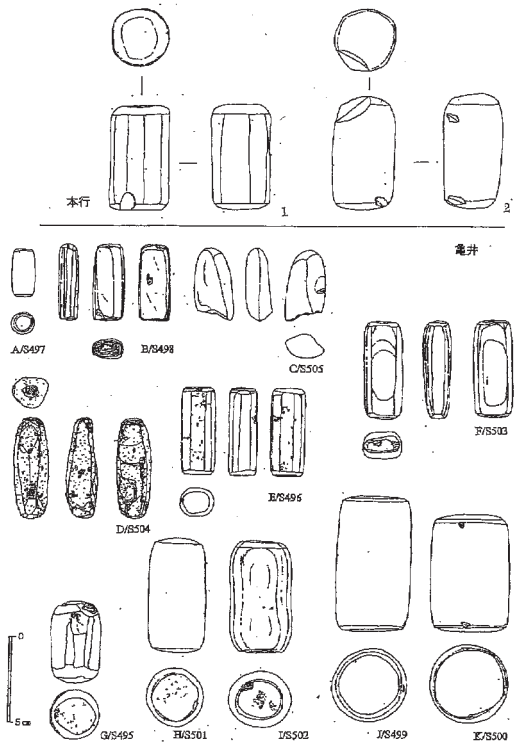


図27　本行遺跡(1･2)と亀井遺跡の石製天秤権(A～k)

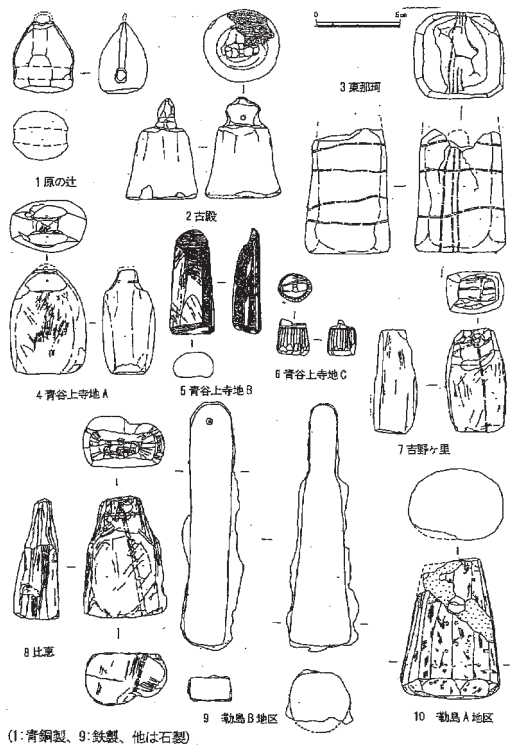


図28　日韓の棹秤権

には鋳型の合わせ目の痕が残り、下方には両側面をやや斜めに径５～6㎜の孔が貫通する。これが出た包含層の土器は、弥生時代中期～古墳時代前期で、時期幅が広いが、鉛同位体を分析したところ、素材の鉛が中国産で、弥生時代の三遠式銅鐸や広形銅矛などに近いため、弥生時代後期に属する可能性が高いとされた（長崎県 2005）。

いっぽう、鳥取市青谷上寺地遺跡の石権は三点あり、報告書では銅鐸形石製品と報告された。しかし、銅鐸の模倣品には銅製品や土製品があり、いずれも中が空洞で、舌をぶら下げると舌が当たって音が鳴る。これに対して、青谷上寺地遺跡の３点は中空ではなく中実で、しかも実際に使って吊り下げた際の吊り手（鈕）の孔とその付近の紐ズレ痕や、破損防止のために身部を緊縛した紐ズレの痕跡があるので、銅鐸形石製品やその未成品ではなく石製棹秤権である。

このうち一番小さい権（図 28 － 6）の時期は弥生時代後期後半で、現状の重さは 7.5 ｇである。石質は緑色凝灰岩で、吊手は上半部を欠失する。図 28 － 5 は時期不明で、現状の重さは 39.8 ｇである。石材は緑色片岩とされ、全体的にやや青みを帯びた黒灰色である。吊手部分は半円形で身部よりもかなり薄く、孔から上方に紐ズレ痕があり、身部にも紐ズレ痕が見られる。図 28 － 4 の時期は弥生中期～古墳時代前期初頭で、石材は黒色の蛇紋岩製とされ、現状の重さは 141.2 ｇである。本来の吊手は半円形で、上端近くに孔をあけて使用していたが、破損したために吊手の上部を取り除いて平坦にして、再び孔をあけようとして途中で放棄したと見られる。これら３点はいずれも吊り手をもつ形態なので、時期は中期後半以降と見られる。

このほか、貨泉が４点出た亀井遺跡でも 1981 年７月にＳＫ 3165 という土坑から石製の天秤

表1　亀井遺跡の石製天秤権

番号	報告書番号	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	石材	重さ（g）	Aの何倍か	Aを基準		
								理想倍数	想定重量（g）	誤差
A	S497	27.4	13.3	12.7	砂岩	8.7	1.00	1	8.7	0.0%
B	S498	43.6	18.3	11.4	ストレート	17.6	2.02	2	17.4	1.1%
C	S505	43.2	21.5	13.7	チャート？	17.6	2.02	2	17.4	1.1%
D	S504	(59)	(20)	(18)	砂岩	32.1	3.69	4	34.8	-7.8%
E	S496	50.2	19.5	16.4	砂岩	34.5	3.97	4	34.8	-0.9%
F	S503	56.0	22.3	15.6	輝緑岩	35.4	4.07	4	34.8	1.7%
G	S495	47.7	28.7	28.0	輝緑岩	68.9	7.92	8	69.6	-1.0%
H	S501	65.9	33.4	31.8	細粒砂岩	134.7	15.48	16	139.2	-3.2%
I	S502	64.6	35.1	32.0	斑状輝緑岩	139.8	16.07	16	139.2	0.4%
J	S499	78.5	42.0	41.7	細粒砂岩	276.5	31.78	32	278.4	-0.7%
K	S500	68.1	45.2	44.4	輝緑岩	280.0	32.18	32	278.4	0.6%

権が出ていたことがわかった（森本晋 2012）。この石権は 11 点あり、その重さは未完成品の D を除く 10 点のうち、最も軽い 8.7 g の A が基本単位で、B と C はその 2 倍、E・F は 4 倍、G は 8 倍、H・I は 16 倍、J・K は 32 倍となり、2 の累乗倍の重さを持つので、本来は 2 組の天秤権だったとみられる（表 1）。ＳＫ 3165 からは弥生時代前期新段階の土器片が出ため、報告書では弥生時代前期の遺構と判断された。しかし、弥生前期新段階から弥生後期前半が、想定される最大の年代幅であるとの考えも提示されている（中尾智行 2015）。この石権が弥生後期前半まで新しくなれば、貨泉 4 点とも有機的に関係づけられる。実際に佐賀県鳥栖市本行遺跡Ⅱ区 65 号土坑では、後期前半を主体とする土器群とともに、亀井遺跡と同様な石製天秤権が 2 点出ている。島根県江津市古八幡付近遺跡でも中期前半から後期初頭の土器ともに同様な石製天秤権 1 点が環濠から出ていて、こうした石製天秤権の時期は中期後半から後期前半とみられる。最近では池上曽根遺跡でも 8.7 g を単位とする石製天秤権の存在が明らかにになった（千葉太朗 2017）。

また、佐賀県吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区Ⅶ－ 316 調査区のＳＸ 2487 や福岡市比恵遺跡 125 次の井戸ＳＥ 391 でも、鈕をもつ石製棹秤権が出ている。吉野ヶ里ＳＸ 2487 からは中期前半と後半の土器片がでており、比恵ＳＥ 391 の土器は弥生時代後期前半が主体である。これら九州の棹秤権も、石製・土製ともに吊り下げた際の紐ズレだけでなく、鈕と体部の縦横にも紐ズレ痕も残り、やはり破損防止のために紐で体部を縛ったとみられる。これらの棹秤権は漁撈用の錘ではない。漁撈用であれば似たような錘がたくさん出るはずだが、それぞれ個性的で 1 点ずつしかないため、やはり棹秤権と考える。

天秤権･棹秤権は､これまで空白だった瀬戸内海地域をはじめ各地で出土例が増加しており（輪内遼 2017）、海村だけで使用されるのではなく、拠点集落での計量にも使用されたが、交易の場での使用頻度が高かったと考える。

韓国勒島遺跡では石製と鉄製の棹秤権が出ており、5 点の中国銭貨とあわせて、海村交易の場で中国銭貨と権が使用されたことを物語る。

(6) 三雲・井原遺跡の石硯

弥生時代の伊都国の国邑である三雲・井原遺跡で最初に発掘された石硯は、略長方形の板石の破片で、三辺は割れてなくなり、長辺の一部だけが残っていた。長さ4.6cm、幅4.3cmの砂質片岩の石材である（図29：番上硯1）。2015年12月2日に出ており、時期は弥生時

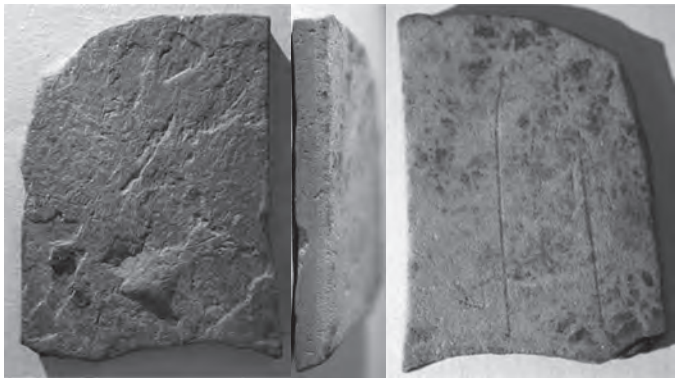


図29　番上硯

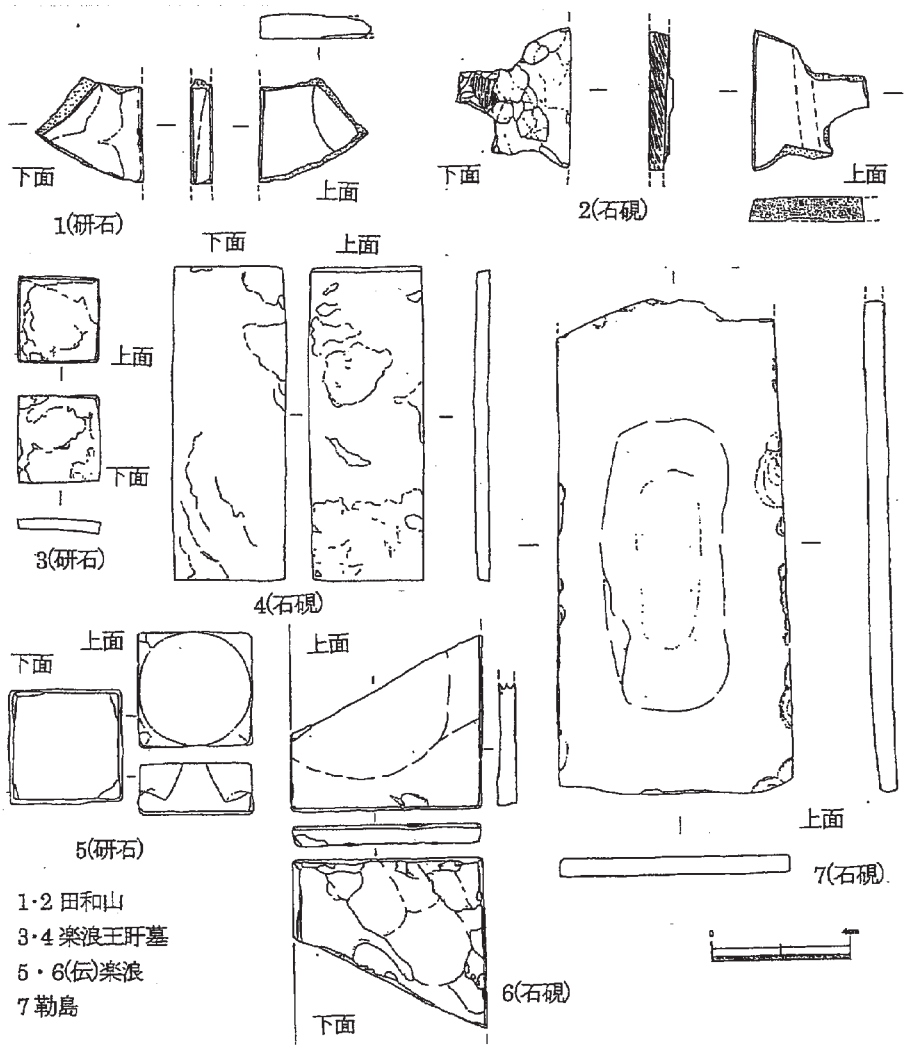


図30　日韓の研石と石硯

代中期後半から古墳時代初である。その後、2016 年 9 月 29 日には、もう 1 点出ていたことが報道された（番上硯 2）。

漢代の石硯には現在の硯のような海はない。漢代の墨が小さな粒で、墨汁をつくるには硯の上に置いて水を加え、上から同様につくった小さな平面方形の研石に木製の把手をつけて磨りつぶす（白井克也 2004）。石硯と研石の 2 点で 1 組になるため、ここでは各遺跡で出た石硯や研石は一括し、各遺跡名を付けて〇〇硯と呼ぶ。

番上硯 1 と比較対照した資料（図 30）は、島根県松江市の田和山遺跡で出土した石硯 1 点・研石 1 点（田和山硯）、楽浪王盱墓で出土した石硯 1 点・研石 1 点（王盱墓硯）、東京国立博物館が所蔵する小倉コレクション中の（伝）楽浪出土石硯 1 点・研石 1 点（（伝）楽浪硯）、韓国慶尚南道泗川市勒島遺跡Ｂ地区カ－ 245 号住居跡から出土した石硯 1 点（勒島硯）である（武末純一・平尾和久 2016）。

番上硯 1 ・2 を石硯と断定した特徴は三つある。

第一はうすく平らに剥がれて金雲母上の粒子を含む灰黒色の砂質頁岩[6]が石材で、六㎜ほどの厚さをもち、これまで楽浪郡で発掘された長方形石硯の材質と共通する。

第二は、裏面が加工されず母岩から割り剥いだままの状態が残されている点である。これは、楽浪彩篋塚（南井里 116 号墳）から出た硯台の復元品からも分かるように、漢代の石硯は硯台に嵌めこんで使う（図 31）ため、裏は全く人目にふれないからである。本品よりは小型で厚さも 5㎜とやや薄いが、長方形石硯の完形品である楽浪郡王盱墓の石硯をみれば一目瞭然で、やはり裏面は割り剥いだままである。

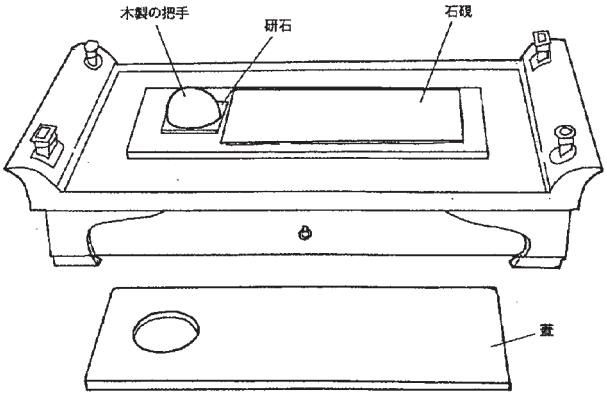


図31　楽浪彩篋塚(南井里116号墳）の復元硯台

第三に、こうした石硯は長方形の大きな板材の裏面に縦横の直線的なミゾを厚さの中ほどまで擦り切って、残りは板チョコを割るように、割ってつくり、側面には擦ったＶ字の溝の片方が残るため、側面が表面とは直角にならず鈍角をなす点である。しかも裏面側の側縁は、割った面（破面）をそのまま残すか擦って平滑に仕上げ、最初の溝の壁とは明確に区別できる。

番上硯 1 でもＶ字溝の壁と破面の研磨仕上げ面が明瞭に区別できた。王盱墓の石硯も研石を伴い、研石の上面には把手の痕が丸く残る。番上硯 1 も研石と共に使われたはずである。番上硯 2 も 1 と同様の特徴をもつ。

日本列島での文字使用は、今回の番上硯の発見で弥生時代にさか上った。それは、これまで予想された通り、外交交渉の場で使われたとみる。

すでに述べたように、この時期の交易・交渉には三層構造が見られる。下層に対馬と韓国南海

岸地帯の日常的な交流があり、中層には日韓海村世界の交易がある。原の辻型の海村はその重要な一環をなす。そして、上層には初期筑紫政権と韓半島・中国大陸の政権との交渉があって、番上硯1・2はこのレベルでの文字使用を示す。

問題は、私のいう海村交易世界でも文字が使われたかである。この点で注目されるのが田和山硯で、時期は弥生中期後半である。石硯の上面は研磨で平滑に仕上げ、下面は粗割のままで研磨していない。ただし、石材は内部が白色で、凝灰岩と報告された。研石の石材は楽浪で使用された石硯・研石と同様で砂質頁岩とみられる。上面は割ったままで研磨せず、木製の把手を付けたとみられる。田和山硯は実用品ではなく有力者の権威の象徴との声もあったが、今回の番上硯の出土で、やはり実用品と考えるべきであろう。田和山遺跡自体は海村とはし難いが、付近に海村があり、海村交易の場で文字が使われていた可能性を示す。

では、日本列島の渡来人だけでなく弥生人も文字を使ったのか。三雲・井原遺跡八龍地区の大溝から出た弥生時代後期後半～終末ごろの大甕の頸部には、焼く前にヘラで刻んだ文字があり、「竟」と判読されて鏡と解釈された。弥生人がつくった土器に文字が刻まれているので、弥生人も実際に文字を使った証拠となる。青谷上寺地遺跡は、貨泉4点と棹秤権が3点出ている海村だが、いまのところ楽浪土器はなく、三韓土器もわずかである。だからと言って渡来漢人・韓人しか文字を使えず、青谷上寺地遺跡で文字が使われなかったとするのは、弥生人の学習能力を無視した議論であろう。

最近では福岡県筑前町薬師ノ上遺跡で、弥生時代中期後半から後期前半の時期の可能性が高い石硯の完形品が出土していたことが明らかにされた。文字使用の広がりを表わす1例と言えよう(柳田康雄・石橋新次 2017)。

また、3世紀から4世紀にかけて、中国銭貨の出土量は激減して権も古墳時代にはほとんど見られなくなる。文字使用と中国銭貨の使用は古墳時代前期に一度断絶する。筆者は、弥生時代の文字使用と中国銭貨の使用は、中国漢帝国の強大な力があって初めて実現したのであり、いわばパックス・ロマーナならぬパックス・ハンナの産物で、そうした漢帝国の強大な力がなくなれば消滅する徒花だったと考えている。

(7) 朝鮮半島南部での後半期の弥生系土器と弥生人

勒島遺跡は、すでに述べたように弥生中期後半の須玖Ⅱ式土器が大量に出て盛行し、渡来弥生人が集住して、後期初頭まで続く海村交易の一大結節点である。初期の楽浪土器も出ており、壱岐から糸島地域に偏在する楽浪土器の様相からみて、楽浪郡から朝鮮半島南部の沿岸にあるいくつ

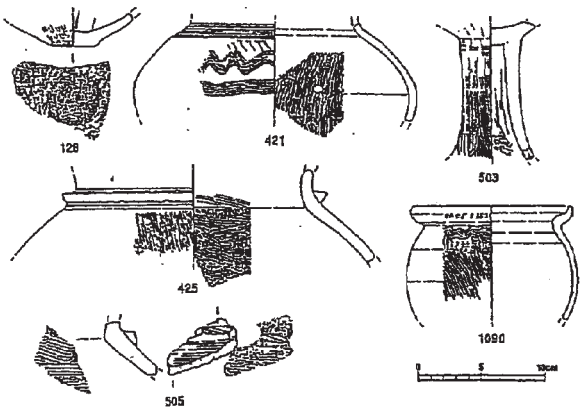


図32　金海会峴里貝塚の弥生系土器(後半期)

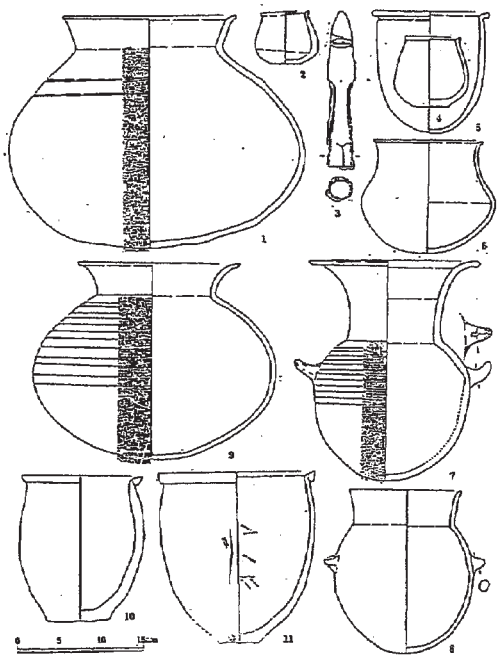


図33　茶戸里の三韓土器

1：35号　2·3：72号　4：34号　5：52号
6〜8：31号　9：64号　10：18号　11：62号

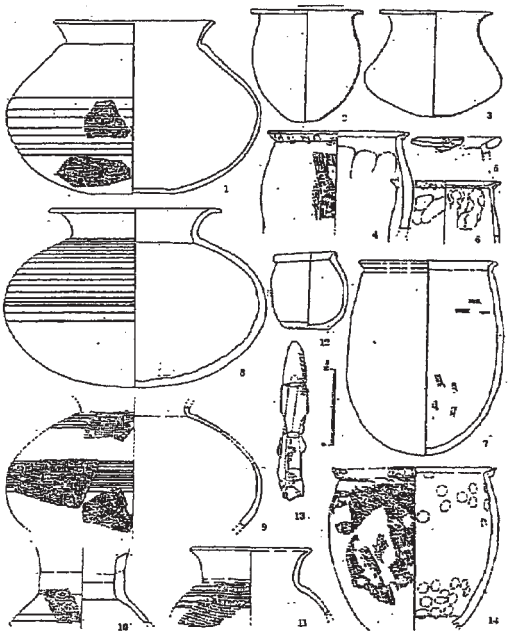


図34　日本の三韓土器

1：小性島　2·3 佐護白岳　4〜7：三根遺跡山辺地区
8：カラカミ　9〜11：原の辻　12：比恵·那珂遺跡
13：立岩 36 号　14：青谷上寺地

かの結節点－勒島－（対馬）－壱岐－糸島とつながった楽浪交易網の一環でもあるといえよう。B 地区カ－ 245 号住居跡から出た勒島硯には鉄製の棹秤権や弥生時代中期後半の弥生系土器が伴うことも、交易の場での文字使用の可能性を支える。

いっぽう、金海会峴里貝塚では前時期に引き続いて中期後半から後期終末までの弥生系土器が出ており（図 32）、発掘土量当たりの弥生系土器の密度は勒島遺跡を上回って（武末純一 2013a）、渡来弥生人の存在をうかがわせる。またこの時期には金海地域を中心に、北部九州でも福岡平野とその周辺である奴国の地域でつくられた青銅器（中広形・広形の銅矛や小型仿製鏡）が流入している。また逆に、金海地域でみられるような三韓土器や青

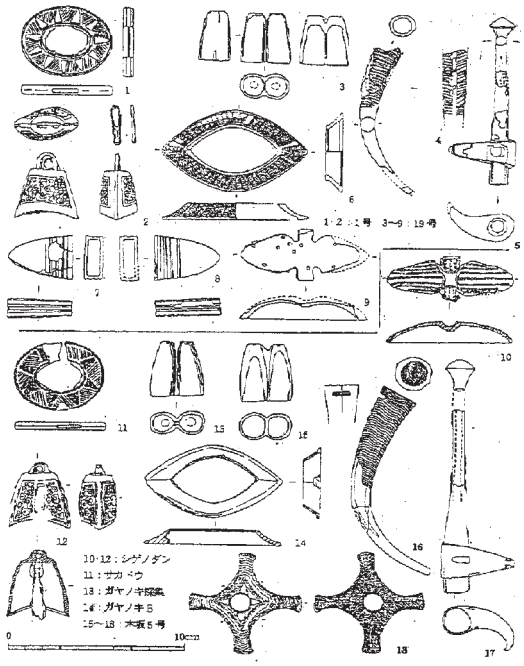


図35　茶戸里と対馬の異型青銅器

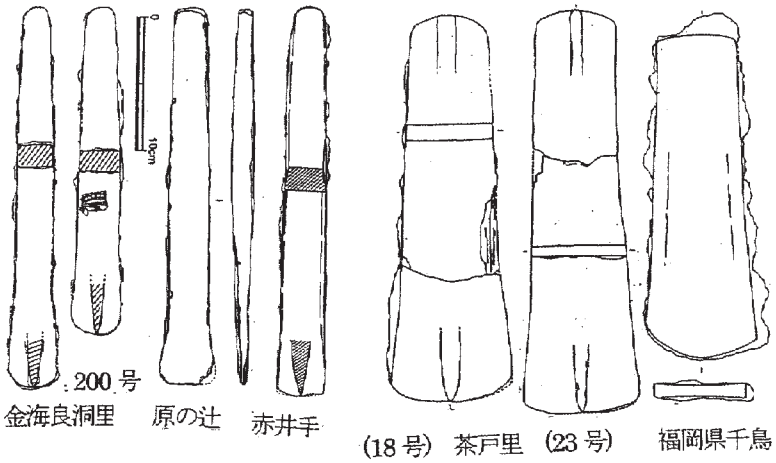


図36　日韓の大型の棒状鉄斧・板状鉄斧

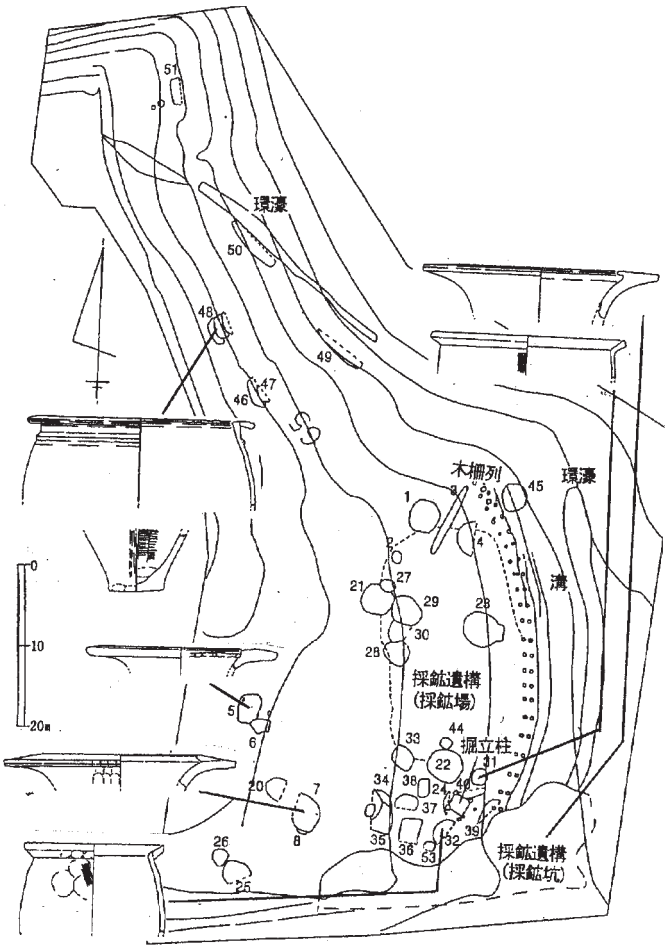


図37　韓国蔚山市達川遺跡の弥生系土器

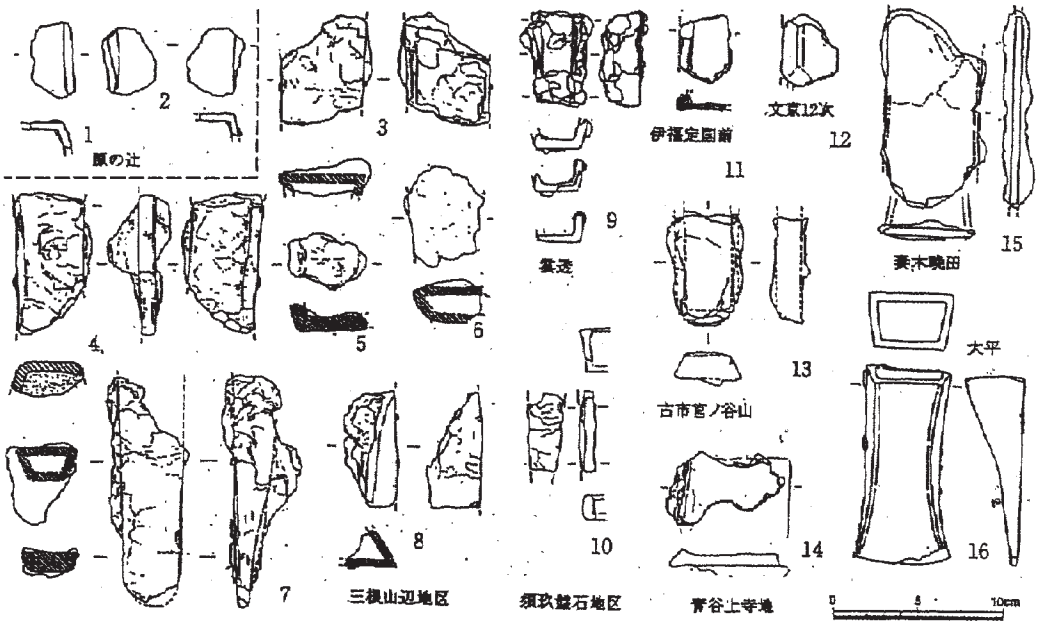


図38　弥生時代の梯形鋳造鉄斧

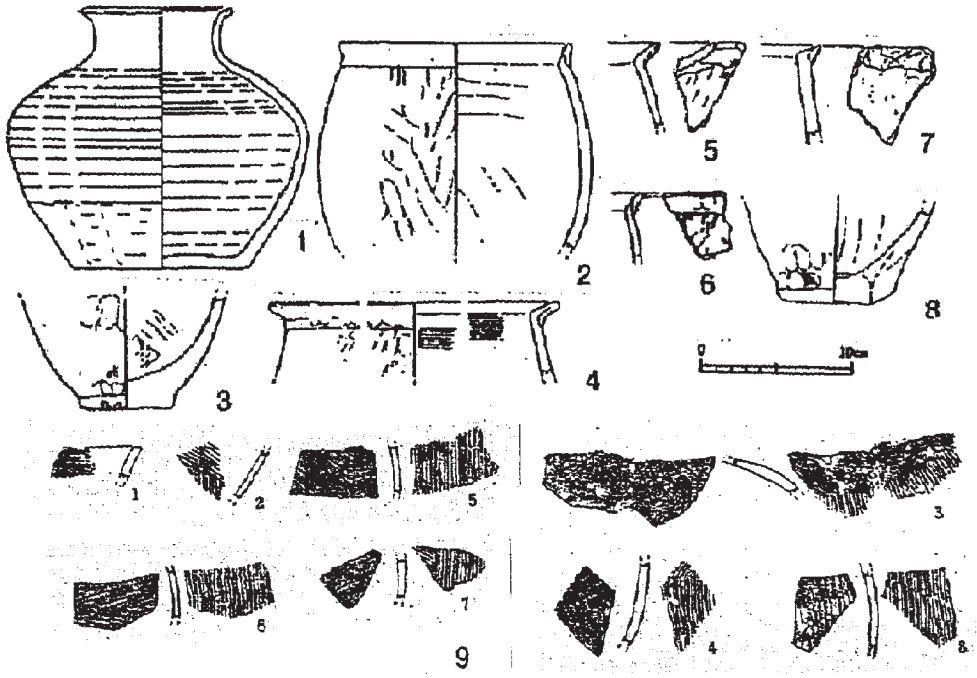


図39　島根県山持遺跡の楽浪土器・三韓土器

銅器・鉄器は対馬で多く出土し（図 33 ～ 36）、それらのうち三韓土器・鉄器は壱岐でもかなり出土して福岡平野にもそれなりにあるという偏在性を示し、金海－対馬－壱岐－福岡という三韓（弁韓）交易が、基層部分で弥生時代後半期の日韓交流を支えていたといえよう。

このほか、蔚山地域では鉄鉱石を採掘した蔚山市達川遺跡の一角に、弥生系土器が集中して出ている。これらの弥生系土器は須玖Ⅰ式甕 1 点を除くと、弥生中期後半の須玖Ⅱ式土器が 4 点あり、擬無文土器もある（図 37）。これらの資料から、鉄鉱石の採掘活動に弥生人が関わった可能性が浮上する（武末純一 2013c）。

⑻　中国・四国地域の鋳造梯形鉄斧

弥生時代後半期に中国・四国地域で出土する朝鮮半島系文物は、北部九州経由で流入したとされてきた。北部九州地域と中国・四国地域で出るそれぞれの地域の土器からみても、多くの朝鮮半島系文物は北部九州に類例があるため、北部九州経由と考えてよい。しかし、それらとは異なり、朝鮮半島と中国・四国地域の直接交渉を示すのが梯形鋳造鉄斧である。日本列島で出土する弥生時代の梯形鋳造鉄斧（図 38）は、朝鮮半島の嶺南地域産が多く、楽浪郡産がわずかに含まれると見られる。これら弥生時代の梯形鋳造鉄斧のうち、中国・四国地域で出た鋳造梯形鉄斧はほとんどが上面の両側部に突線を持つのに対して、九州の鋳造梯形鉄斧は今のところ全て上面の両側部に突線を持たない。突線を持たない梯形鋳造鉄斧が分布する北部九州から、突線を持つ鋳造梯形鉄斧が流入したとは考えられない。突線を持つ鋳造梯形鉄斧は、中国・四国地域と朝鮮半島との直接交渉を示す資料と言えよう。韓半島の金海会峴里貝塚では突線を持たない例が多く、隍城洞遺跡や、蔚山地域を含めた東海岸部では突線を持つ例が多いようである。

この点で注目されるのが、弥生後期前半から中ごろの楽浪土器壺と勒島式系薄型三角形口縁の三韓軟質土器甕が出土した島根県山持遺跡である（図 39）。楽浪土器は短頸壺の完形品 1 個体と、広口短頸壺はタタキ目と当具痕の様相から 2 個体以上の破片がある。三韓軟質土器甕は 5 個体ほどの破片があり、渡来辰韓・弁韓人の存在を示す。こうした勒島式系薄型三角形口縁は北部九州本土ではまとまってはみられない。沖ノ島での勒島式系薄型三角形口縁甕の出土も勘案すると、中国・四国地域から朝鮮半島東海岸地域への交流ルートの検討が望まれる。

6　金官加耶・百済（馬韓）との交易－西新町遺跡－

北部九州の福岡市西新町遺跡は砂丘上の遺跡で、古墳時代前期前半の布留 0 式併行期から、後半の 4 世紀後半頃（筆者の有田ⅠＡ期）の朝鮮半島系の遺物が、この時期の日本列島では珍しく大量に出る。遺跡は大きく西地区と東地区に分かれ、その間は少し地形が落ち込む（図 40）。

東地区の調査面積は少ないが、4 世紀代の加耶土器瓦質短頸壷 2 点と、土師質の擬加耶土器で肩に一条の暗文線が入る炉形土器 1 点が出た。西地区では、加耶土器もあるが、直口で平底に小さな蒸気孔が多数あいて棒状把手がつく軟質土器甑、頸部が一度直立する軟質土器小型平底鉢、大きな平底で把手の孔が上下に貫通する瓦質・陶質土器の短頸直口壷など、全羅道（湖南）地域の百済（馬韓）土器が主体をなす。西新町の渡来人は、東地区が加耶系、西地区は百済（馬韓）系が主体であったといえる。前時期にみられた楽浪土器は出土せず、中国銭貨も五銖銭と貨泉が

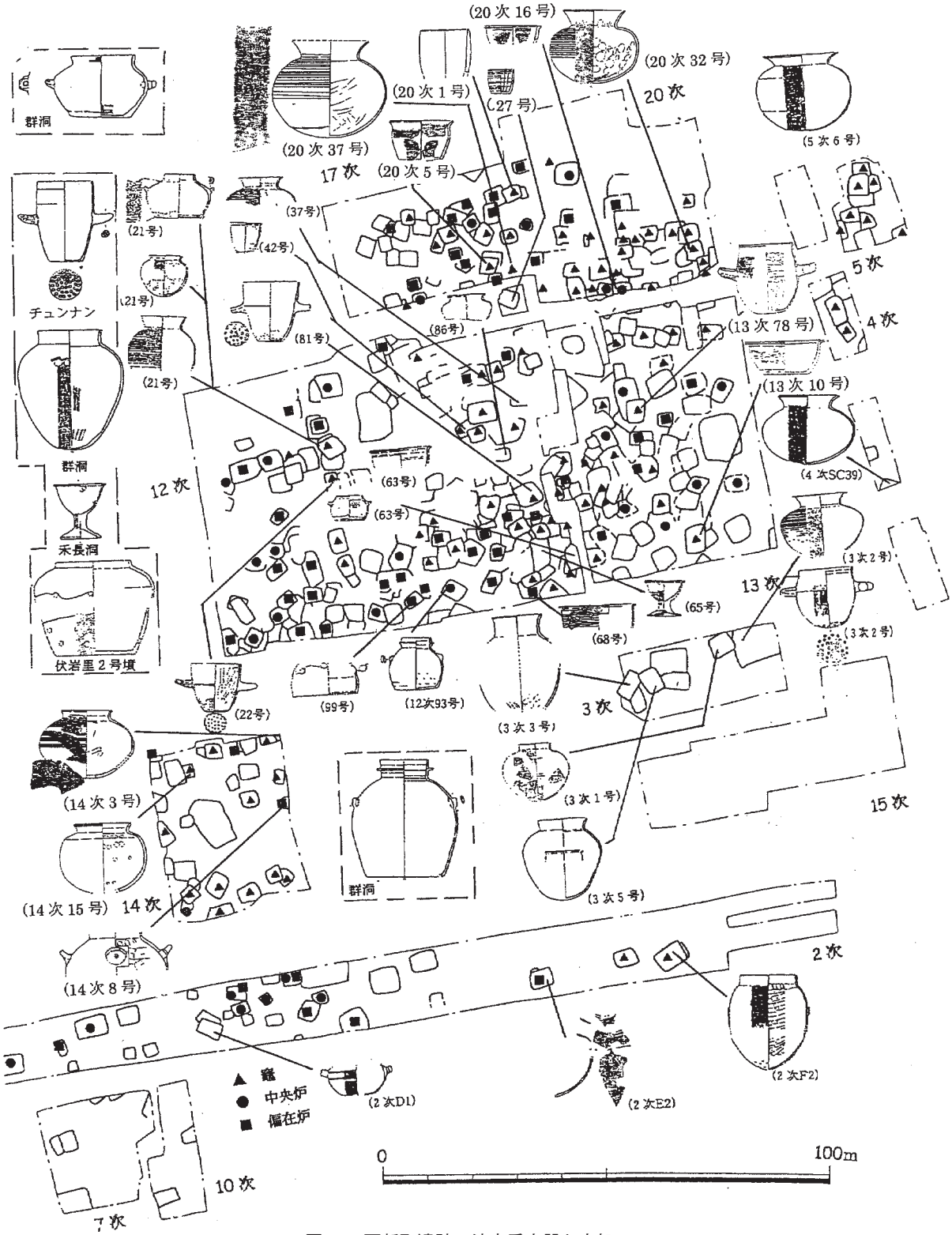


図40　西新町遺跡の渡来系土器と火処

各１点ずつの合計２点にすぎない（図 41）から、漢帝国を背景とした楽浪交易での文字と中国銭貨の使用はほとんど終息している。

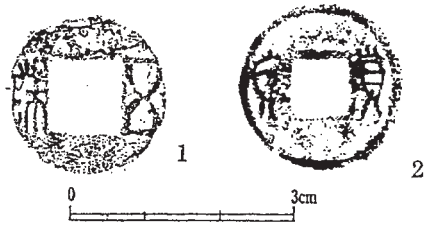


図41　西新町遺跡の中国銭貨

1（12 次 96 住）　2（17 次 38 号住）

渡来人の居住を示す資料には、ほかに竈（図 42 － 3)がある。粘土で構築し、一つ掛けが基本で、嶺南地域の特色と一致するが、湖南地域の小型住居の竈も一つ掛けである。いずれにしても、この時期の北部九州の火処は住居の中央を掘りくぼめた中央炉（図 42 － 1）だから、渡来人の故地である朝鮮半島南海岸地帯の竈が、西新町遺跡で再現されたことになる。また、本遺跡では竈と中央炉のほかに、壁際に偏った炉（偏在炉、図 42 － 2）も新たに出現する。遺跡の中でこれらの炉を持つ住居跡の分布をみると、偏在炉は、竈をもつ住居群の周りにあり、さらにその外側には中央炉の住居群があるから、偏在炉は在来人と渡来人が接触・交流して出現した火処である。

在来人と渡来人の相互交流・影響関係は、三国土器の要素が入った擬土師器や、土師器の要素が入った擬三国土器にも現れる。擬土師器の布留式系甕には、縦貫通の有孔把手という百済（馬韓）土器の要素を持ち、内面もヘラケズリではなくナデ仕上げの分厚い例（図 43 － 10）と、形態やケズリによる器壁の薄さは通常の布留式系甕だが、三国土器の要素である斜格子のタタキ目を持つ例（図 43 － 11）がある。図式的には前者が渡来人による製作、後者は倭人の製作となる。擬三国土器では、直口内屈する平底の無頸壷で、右肩上がりの横平行叩き目を縦方向の細かい刷毛目で消し、胎土・焼成を含めて、つくりも形も土師器だが、底部付近外面を横ケズリして底部に小円孔を多数あけ、倭人製作と考えられる擬三国土器甑（図 43 － 14）と、土師器の技法である内面ヘラケズリを施すが、膨らんだ胴部に把手がついて口がゆるやかに直立し、平底気味の丸底に小円孔があくなど、加耶西部地域の要素が強い加耶人製作の擬三国土器甑（図 43 － 12）の二者がある。

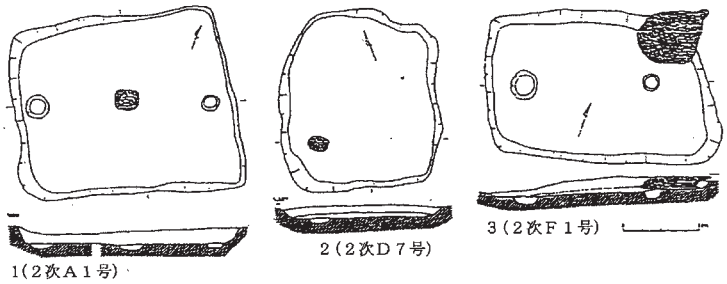


図42　西新町遺跡の中央炉(1）・偏在炉(2）と竈を持つ住居(3)

こうした擬土師器や擬三国土器は、竈や偏在炉とともに倭人と百済（馬韓）人や加耶人の混住を示す。また、渡来系土器の中には韓国の忠清道（湖西）地域の土器もある。ただし、土器の量は土師器が圧倒的で、その土師器も山陰系や近畿系、北部九州系など様々で、多軸性がみられる。朝鮮半島系土器は多くの遺構から出るが、１遺構では多くても数点で、渡来系だけの例はなく、渡来人は西日本各地の倭人と混住した。これらの様相からみて、西新町遺跡は国際交流港であった。その主な目的は本遺跡５次２号住居跡の大型板状鉄斧形の鉄素材(図 44 上－ 1)からみて、「加耶の鉄」をめぐる交易にあった。同様な鉄素材は金官加耶の初期の首長墓（大成洞 29 号墳）で

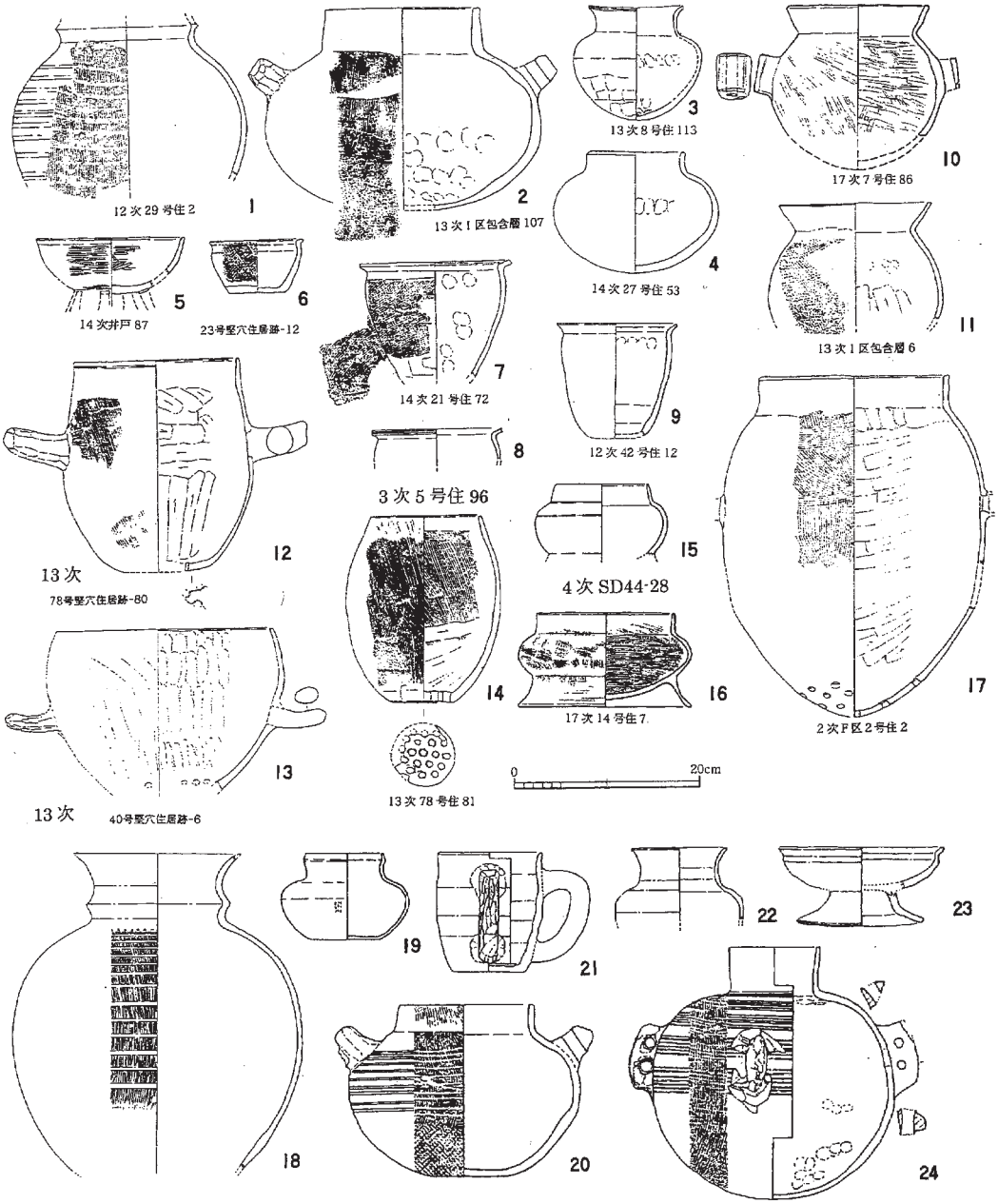


図43　西新町遺跡(1～17）と原の辻遺跡(18～24）の半島系土器

も出ている。また、福岡市博多遺跡ではこうした鉄素材を切断した鉄片や大型の椀形滓、断面が蒲鉾型のフイゴの羽口が出ており、精錬作業もしている（図44下)。

本遺跡の周囲の遺跡ではこうした竈や渡来系の三国系炊事用土器は出ない。これは規制の強さと共に、地域レベルでの生活文化定着の失敗を示す。また、本遺跡の墓地である藤崎遺跡の方形周溝墓で出た渡来系土器は､土師質の擬三国炉形土器１点のみである。本稿第４章でも述べたが、西新町遺跡の分析結果からも、渡来人の墓地は別にあった可能性や墓には渡来系土器を副葬しな

い風習ないし規制が存在した可能性のほかに、一定期間定住するがここで一生を終えない人々、つまり「往来する渡来人」の可能性が提起される。

本遺跡と同様な渡来系土器は、長崎県原の辻遺跡（図 43 － 18 ～ 24）や、山陰・山陽・近畿地域のいくつかの遺跡でも出ており（図 45)、奈良県桜井市纏向遺跡などで出た蒲鉾形羽口からみても、対外交易ルートが近畿まで1本化したと言えよう。

さらに、朝鮮半島の釜山市東莱貝塚や金官加耶の首都である金海鳳凰台遺跡や大成洞古墳群で、布留式系甕を含む多量の土師器系土器が百済（馬韓）系土器と伴出しているから（図 46・47)、西新町遺跡は湖南地域から近畿地域までつながる金官加耶－倭政権交流の一大結節点と評価できる。本遺跡の国際交流港設定には､「加耶の鉄」の販路拡大や緊迫する朝鮮半島の政治・軍事情勢への対応を探る金官加耶の意向もあった。渡来人集落の分析は、日本列島側からだけでなく、故地の側からの視点も必要である。

また、京都府椿井大塚山古墳に百済系サルポ（田の畔に水口を切り首長権を示す鉄製の儀器）や、朝鮮半島の湖西地域で製作された分厚い弾琴台型鉄鋌を加工した大型板状鉄斧 3 点[7]（図 48）が副葬されたとする研究成果（李東冠 2016）からは、百済の間接的な関わりも見えてくる。

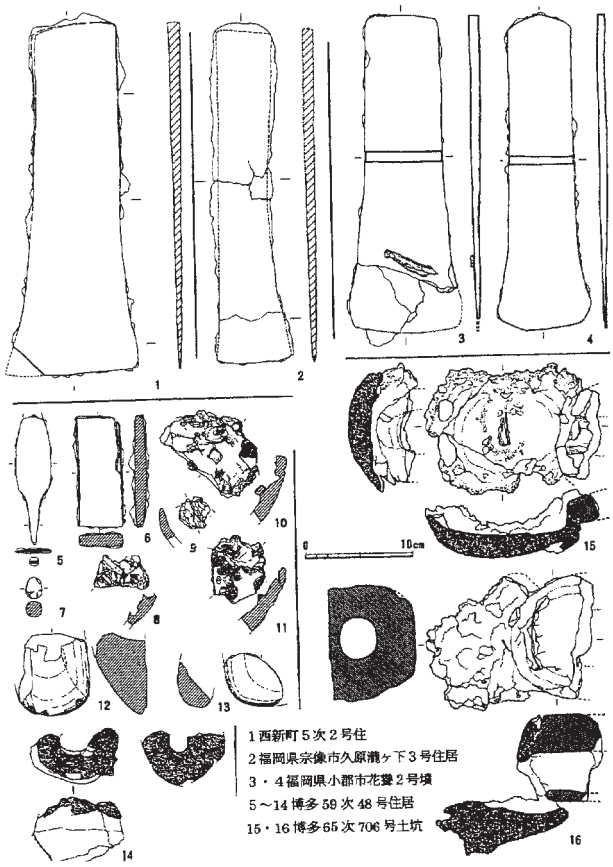


図44　大型鉄素材と博多遺跡群の鉄器生産

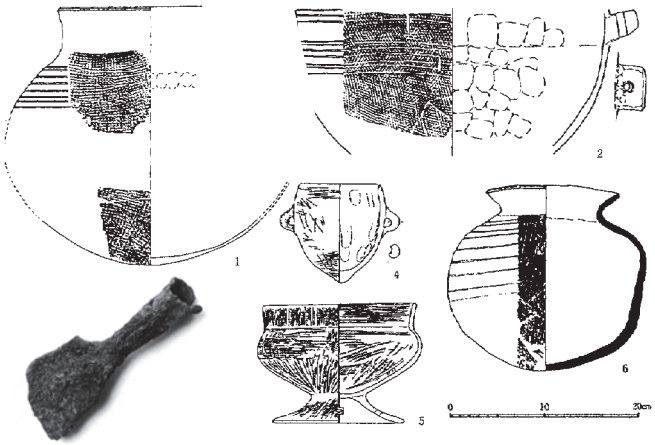


図45　九州以東の朝鮮系資料(古墳時代前期)

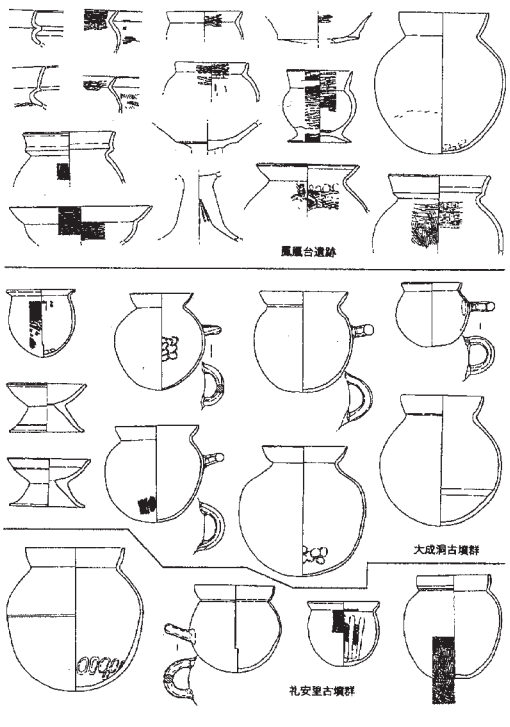


図46　金海地域の土師器系土器

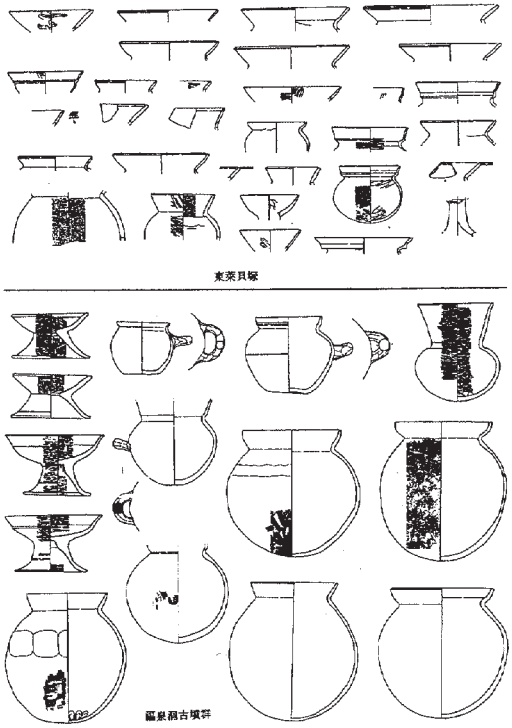


図47　釜山地域の土師器系土器

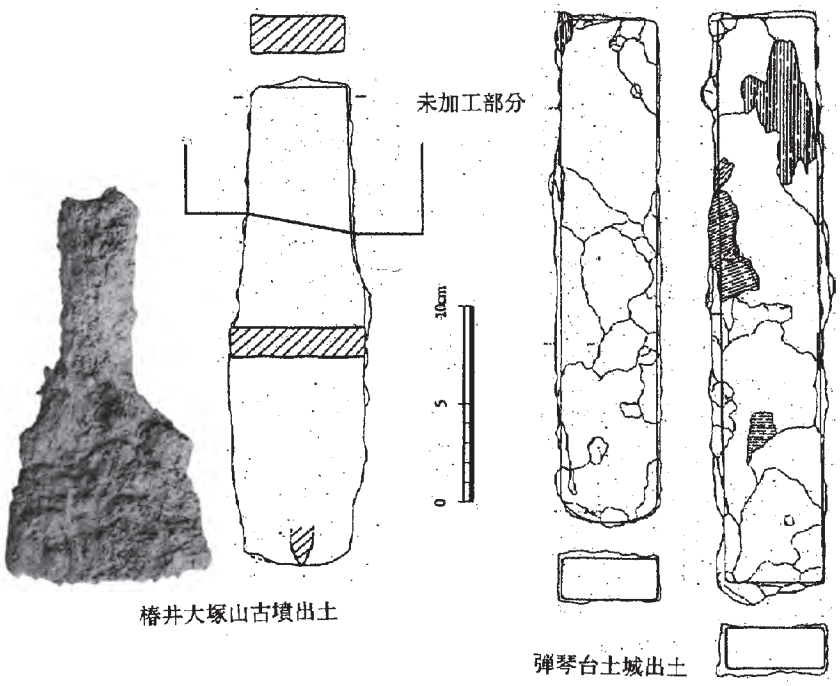


図48　椿井大塚山古墳の鉄斧と弾琴台型鉄鋌

6　おわりに

以上、弥生時代早期から古墳時代前期までの日韓交流の様相を、主に渡来人の観点から、北部九州の資料を中心に述べた。各時期の両地域での渡来人の様相や果たした役割は、一つのモデルで割り切れるものではなく、各時期のそれぞれの地域の社会や歴史的な経緯の中で展開している。その的確な評価は、日本列島側に立った一方的な視点だけではできず、朝鮮半島側に立った視点を加えて初めてなしうることを再度強調して、本稿を閉じる。

（2018 年 1 月 6 日稿了）

註

⑴　現在の韓国考古学界では、無文土器時代を青銅器時代および初期鉄器時代とする考えが一般的 (韓国考古学会 2013) だが、それぞれをまとまった時代とできるかは疑問もあり、本稿では無文土器時代とした。

⑵　渡来人側の土器の変容品だけでなく、渡来土器の影響によって変容した在来人側の土器も擬〇〇土器と呼ぶ。例えば日本列島で変容した朝鮮三国系の土器を擬三国土器と呼び、三国土器 (やその製作者) の影響で変容した土師器系土器を擬土師器と呼ぶ。

⑶「環濠集落」が一般的だが、「濠」の字は最初から防御の意味が入るので、私はあえて「環溝集落」という言葉を使う。

⑷　こうした無文土器人を難民とみる説もあるが、後述する朝鮮半島出土弥生系土器の様相からすれば弥生人と無文土器人は相互交流しており、難民の一方的な渡来ではない。

⑸　金海会峴里貝塚の金海式甕棺は永く行方不明であったが、近年再発見されて報告書が刊行された (国立金海博物館 2014)。

⑹　番上硯 1 の速報 (武末純一・平尾和久 2016) では、当初の鑑定結果から、砂質片岩としたが、その後、砂質頁岩の方がよいとの教示を得たため、砂質頁岩としている。

⑺　この大型板状鉄斧は、木製柄部を装着する頭部が狭くて厚く、中段部が膨らんでこのままの形態では日韓両地域にその類例を見出せない形態である。観察の結果では、頭部は鉄素材の原形をそのまま残すが、その他の中段部と刃部は原形から鍛造加工されたことが確認されている。また、頭部は弾琴台型鉄鋌の形態や規格と同一であるという。

【引用参考文献】

朝日新聞社 1980『邪馬台国への道』

李東冠 2016「日本列島古墳時代前期の百済系鉄鋌の流入とその系譜」『古文化談叢』第 76 集　九州古文化研究会

岡崎敬 1968「倭の水人」『日本民族と南方文化』（平凡社）

岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹 2004「三坂七尾地区墳墓出土貨泉について―全国古代中国銭出土一覧―」『福岡考古』第 21 号

小田富士雄 1982「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」『古文化談叢』第 9 集

小田富士雄・韓炳三編 1991『日韓交渉の考古学』弥生時代篇（六興出版）

梶山勝 1993「「漢委奴國王」金印と弥生時代の文字」『古文化談叢』第 30 集 (上)

榧本杜人 1980『朝鮮の考古学』（同朋舎出版）
韓国考古学会 (武末純一　監訳　庄田慎矢・山本孝文　訳)2013『概説　韓国考古学』(同成社)
久住猛雄 2016「「原の辻の対外交渉」(武末純一) への討論文」『勒島と原の辻を通じてみた東アジア交流の様相』
古賀信幸・豆谷和之 1995「山口県宇部市沖ノ山発見の銭貨資料」『出土銭貨』第 3 号
佐藤大樹 2015「東アジアの中の貨泉」『駒澤考古』第 40 号
志摩町教育委員会 1983『御床松原遺跡』（志摩町文化財調査報告書第 3 集）
志摩町教育委員会 1987『新町遺跡』（志摩町文化財調査報告書第 7 集）
志摩町教育委員会 1988『新町遺跡Ⅱ』（志摩町文化財調査報告書第 8 集）
白井克也 2004「朝鮮半島の文化と古代出雲」『田和山遺跡国史跡指定三周年記念講演記録集』
第 19 回国民文化祭前原市実行委員会ほか 2004『シンポジウム邪馬台国の時代「伊都国」』
高倉洋彰 1991「文字との邂逅」『考古学ジャーナル』328
武末純一 1983「壱岐・対馬」『三世紀の考古学』下巻（学生社）
武末純一 1989「山のムラ，海のムラ」『古代史復元 4 －弥生農村の誕生－』（講談社）
武末純一 1991『土器からみた日韓交渉』学生社
武末純一 1994「弥生中期の人々と文字」『西日本文化』300 号
武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット 3(山川出版社)
武末純一 2004a「空白、空白？、空白！―考古学における空白論ノート―」『海峡の地域史―水島稔夫追悼集』水島稔夫追悼集刊行会
武末純一 2004b「加耶と倭の交流―古墳時代前・中期の土器と集落―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 110 集
武末純一 2005『韓国無文土器・原三国時代の集落構造研究』―平成 14 ～ 16 年度科学研究費補助金＜基盤研究 (C)(2) ＞研究成果報告書―
武末純一 2006「韓国の鋳造梯形鉄斧－原三国時代以前を中心に－」『七隈史学』第 7 号
武末純一 2007「海を渡る弥生人」『第 8 回弥生文化シンポジウム　海と弥生人』(鳥取県教育委員会)
武末純一 2008a「韓国・勒島遺跡 A 地区の弥生系土器」『七隈史学』第 9 号
武末純一 2008b「考古遺物からみた韓日交流」『永き出会い　韓国と日本』（釜山博物館）
武末純一 2008c「日本出土栄山江流域関連考古学資料の性格」『古代栄山江流域と日本の文物交流』
武末純一 2008d「茶戸里遺跡と日本」『昌原茶戸里遺跡の発掘成果と課題』（昌原茶戸里遺跡発掘 20 周年国際学術シンポジウム）国立中央博物館
武末純一 2009a「三韓と倭の交流―海村の視点から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集
武末純一 2009b「考古学における空白論ノート (承前)」『東アジアの古代文化』第 137 号大和書房
武末純一 2010a「集落からみた渡来人」『古文化談叢』第 63 集　九州古文化研究会
武末純一 2010b『日本九州地域古墳時代集落調査および研究の現況』大韓文化遺産研究センター・全南文化財研究院
武末純一 2010c「日本の弥生拠点集落とネットワーク」『青銅器時代の蔚山太和江文化』
武末純一 2010d「「倭国」の誕生」『日本の対外関係Ⅰ　東アジア世界の成立』(吉川弘分館)
武末純一 2011a「弥生時代の集落―北部九州を中心に―」『第 5 回東アジア考古学会・(財) 中原文化財研究院学術大会』（中原文化財研究院）
武末純一 2011b「原三国時代年代論の諸問題―北部九州の資料を中心に―」『原三国時代年代論の諸問題』（世宗文化財研究院）
武末純一 2012a「弥生・古墳時代集落構造論序説」『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～

三国時代 (最終報告書)』日韓集落研究会
武末純一 2012b「新鳳洞古墳群にみられる日本文化系要素」『清州新鳳洞百済古墳群発掘 30 周年紀念国際学術会議』清州市
武末純一 2013a「金海会峴里貝塚出土の弥生系土器」『朝鮮学報』第 288 輯
武末純一 2013b「弥生時代の権―青谷上寺地遺跡例を中心に―」『福岡大学考古学論集』2
武末純一 2013c「韓国蔚山地域の弥生系土器」『柳田康雄古稀記念論文集　弥生時代政治社会構造論』(雄山閣)
武末純一 2015a「3 世紀の列島内外の交流とツクシ」『大集結　弥生時代のクニグニ』(青垣出版)
武末純一 2015b「韓国蔚山地域の弥生系土器再論」『故孫明助先生追慕論文集　友情の考古学』
武末純一 2016a「邪馬台国時代前後の交易と文字使用」『纏向発見と邪馬台国の全貌』(角川文化振興財団)
武末純一 2016b「原の辻の対外交渉」『勒島と原の辻を通じてみた東アジア交流の様相』
武末純一 2016c「弥生時代の日韓の国々 (3)―弥生時代のはじまり―」『第 3 回古代史シンポジウム　IN しものせき　古代史から国際交流を考える　Ⅰ　弥生時代の日韓交流 (3)』資料集
武末純一・平尾和久 2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』第 76 集
武末純一・前田義人 1994「北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庖丁」『九州文化史研究所紀要』第 39 号
田中良之 1991「いわゆる渡来説の再検討」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集 2(文献出版)
千葉太朗 2017「池上曽根遺跡にもあった「石製分銅」」『池上曽根遺跡史跡指定 40 周年記念事業記録集　環濠集落の実像』
辻川哲朗 2015「丹後・古殿遺跡出土「鐸型土製品」の再検討」『同志社大学考古学シリーズⅩⅠ　森浩一先生に学ぶ　森浩一先生追悼論集』
中尾智行 2015「弥生分銅の発見と、その意義」『計量史研究』37―1
長崎県教育委員会 1995『原の辻遺跡』（長崎県文化財調査報告書第 124 集）
長崎県教育委員会 2005『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 30 集）
長崎県埋蔵文化財センター 2015『平成 27 年度東アジア国際シンポジウム　ロード・オブ・ザ・コイン―弥生時代中国貨幣から見る交流―』
長友朋子ほか 2016「韓半島の竈構造の地域差と時間的変化―釜の 2 つ掛けと 1 つ掛けの違いを中心として―」『日本考古学協会第 82 回総会研究発表要旨』日本考古学協会
中村大 2009「祭祀考古学研究と解釈：コンテクストとスケール」『環状列石をめぐるマツリと景観』
西嶋定生 1991「漢字の伝来―弥生人は漢字を知っていたか」『MUSEUM 九州』38 号
福岡県教育委員会 1985『三雲遺蹟　南小路地区編』(福岡県文化財調査報告書第 69 集）
福岡市教育委員会 2014『比恵 66―比恵遺跡群第 125 次調査の報告―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1237 集）
洪潽植 2010「韓半島の倭系遺物とその背景―紀元後 4 ～ 6 世紀前半代を中心に―」『古文化談叢』第 63 集　九州古文化研究会
町田章 1998「三雲遺跡の金銅四葉座金具について」『古文化談叢』第 20 集 (上)
松江市教育委員会･(財) 松江市教育文化振興事業団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告 1　田和山遺跡』(松江市文化財調査報告書第 99 集)
三宅俊彦 2008「金代・北東アジアの銭貨流通」『アジア遊学』107　勉誠出版
森本幹彦 2008「福岡市西区今宿五郎江・大塚遺跡」『嶺南考古学会・九州考古学会第 8 回合同考古学会　日韓交流の考古学』
森本幹彦 2015「外来系土器から見た対外交流の様相」『古代文化』第 66 巻第 4 号

森本晋 2012「弥生時代の分銅」『考古学研究』第 59 巻 3 号 (通巻 235 号)
柳田康雄･石橋新次 2017「福岡県筑前町薬師ノ上遺跡の石硯」『平成 29 年度九州考古学会総会研究資料集』
山崎純男 1987「福岡県板付遺跡」『探訪弥生遺跡　西日本編』有斐閣
山崎純男 2008『最古の農村・板付遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」048　新泉社
輪内瞭 2016「弥生時代の権衡―九州の進出資料を中心に―」『古文化談叢』第 76 集
輪内遼 2017「中国・四国の権衡資料―弥生時代の新出資料を中心に―」『七隈史学』第 19 号
＜韓文＞
金京七 2007「南韓出土漢代金属貨幣とその性格」『湖南考古学報』第 27 輯
国立慶州博物館 2007『永川龍田里遺蹟』（国立慶州博物館学術調査報告第 19 冊）
国立金海博物館 2014『金海會峴里貝塚』（日帝強占期資料調査報告 9 輯・国立金海博物館学術調査報告第 13 冊）
国立中央博物館 2012『昌原茶戸里』（国立中央博物館古蹟調査報告第 41 冊）
国立晋州博物館 2016『国際貿易港勒島と原の辻』四川勒島遺跡発掘 30 周年記念特別展
国立晋州博物館 2016『勒島と原の辻を通じてみた東アジア交流の様相』特別展＜国際貿易港勒島と原の辻＞連携学術シンポジウム
国立金海博物館 2014『金海会峴里貝塚』(国立金海博物館学術調査報告第 13 冊)
三江文化財研究院 2009『金海會峴里貝塚』Ⅰ・Ⅱ
李健茂 1992「茶戸里出土の筆について」『考古学誌』第 4 輯（韓国考古美術研究所）
李昌熙 2007「勒島住居址の一断面」『第 17 回考古学国際交流研究会　韓国の最新発掘調査報告会』((財) 大阪文化財センター)
李昌熙 2011「土器から見た加耶成立以前の韓日交流」『加耶の浦口と海上交流』(周留城)
李東注 2004「泗川勒島 C 地区の調査成果」『嶺南考古学 20 年の歩み』(嶺南考古学会第 13 回定期学術発表会
池健吉 1990「南海岸地方漢代貨幣」『昌山金正基博士華甲記念論叢』
漢江文化財研究院 2010『仁川雲北洞遺蹟　調査概要』

【出典一覧】

図 1・図 2・図 3・図 4・図 5・図 6：武末純一 2016c、図 7：山崎純男 1987、図 8：武末純一・前田義人 1994、図 9・図 10・図 11・図 12・図 14・図 15・図 17・図 20・図 22・図 23・図 25・図 26・図 37・図 38：武末作成、図 13：李昌熙 2011、図 16：榧本杜人 1980 および三江文化財研究院 2009 より作成、図 18：志摩町教育委員会 1983 より作成、図 19：李健茂 1992、図 21：小田富士雄・韓炳三編 1991 および長崎県教育委員会 1995 より作成、図 24：国立晋州博物館 2016、図 27・図 28：武末純一 2016b、図 29・図 30：武末純一・平尾和久 2016、図 31：白井克也 2004、図 32：三江文化財研究院 2009 より作成、図 33・図 34・35・図 36：武末純一 2008d、図 39：武末純一 2015a、図 40・図 41・図 42・図 43：武末純一 2010a、図 44・図 45：武末純一 2004b、図 46・図 47：洪潽植 2010、図 48：李東冠 2016